▼特集

建築から歴史を語る

――ドイツ現代史学会第四一回大会シンポジウム――

二〇一八年九月二二日と二三日に大阪市立大学を会場に第四一回ドイツ現代史学会が開催された。北村昌史を組織者としてその二日目にシンポジウム「建築から歴史を語る」をおこなった。当日のプログラムは次の通りである。

シンポジウム　「建築から歴史を語る」

趣旨説明：　北村昌史（大阪市立大学文学研究科）

報告１：　北村昌史
「ブルーノ・タウトのジードルングと大阪市立大学のモダニズム建築群」

報告２：　倉方俊輔（大阪市立大学工学研究科）
「大阪の近代建築と変化する機能・連想」

報告３：　芦部彰（東京大学人文社会系研究科）
「戦後西ドイツにおけるエルンスト・マイの住宅建設」

コメント：　松本彰（新潟大学名誉教授）

本特集は、その記録として、当日の登壇者に、会場での議論をふまえつつ執筆していただいた原稿から成り立っている。建築史研究者の倉方による当日の報告は、読んでいただければわかるように、本特集のドイツ史研究者である他の三人の執筆者に大きな刺激をあたえており、趣旨説明においてもその議論の整理を試みている。

シンポジウムの日の午後には、登壇者でもある大阪市立大学大学院工学研究科の倉方俊輔准教授[1]の案内のもと、大阪市内の近代建築の巡検をおこなった。中之島図書館、大阪市中央公会堂、安治川トンネル、オーストリアの建築家フンデルトヴァッサー（一九二八‐二〇〇〇年）設計の大阪市環境局舞洲工場および下水処理場を訪れた。当日の巡検の模様については、http://yakitori.lit.osaka-cu.ac.jp/user/seiyoshi/ を参照されたい。

注

（1）日本の近現代建築史を多方面から再解釈を試みる倉方氏の業績は、多岐にわたるが、シンポジウム後の巡検との関係からここでは彼も共著者の一人である『生きた建築　大阪』１４０ｂ、二〇一五年と『生きた建築　大阪２』１４０ｂ、二〇一八年のみをあげておく。

建築から歴史を語る——趣旨説明

北村昌史

1　建築から歴史を語る

本特集の課題は、「建築から歴史を語る」という視点から二〇世紀のドイツ都市史をとらえなおすことである。

ドイツ史研究にとどまらず、歴史研究全般において都市史への関心[1]が前面に出てくるようになったのは、一九八〇年代以降のことといえる。その段階の都市史研究は、時期的には一九世紀、対象としては労働者や市民層といった社会階層に焦点が合わせられた。一九九〇年前後からは、都市内の制度、機構、装置の発展が関心の対象となる。その背景には、市民層が労働者や社会問題にどのように対処し、どのように都市を作り替えようとしたのかという問題関心を指摘できる。ただ、こうした関心に立つ研究では、都市社会内の切片を解明するにとどまり、次第に「都市」という枠組みが希薄化していたことは否定できない。

ただ、今世紀に入ってから社会史と建築史との融合、あるいは建築史の側からの社会史の取り込みというべき動向がうかがえる。より具体的な素材から都市社会の変化を把握しようという動向であり、日本の歴史研究においては二〇一三年の都市史学会の設立と雑誌『都市史研究』の創刊に結実したといえる。

ドイツ都市史に関するこうした動向の先駆的研究としてここでとりあげるべきは、一九九七年に書かれたブライアン・ラッドの『ベルリンの幽霊』[2]であろう。帝政から現代にいたるベルリンの建築物、土地、空き地をめぐる力学の分析からこの都市の置かれた社会的、政治的、国際的状況がクリアに浮き彫りにされている。本書でとりあげられているのは、「壁」、国会議事堂、宮殿、スターリン大通り、各種記念碑であり、「壁」を挟んで生じていた建物のない領域にも関心が払われている。本特集にかかわる論点にはまたふれるが、建築物を通じた都市史研究に方向性を示したものと位置付けられる。

このような建築物を主人公とした歴史研究については、とくに欧米の研究だけを参照しなければならないわけではない。日本のドイツ史研究でもこの分野に関して参照すべき研究がある。いうまでもなく、記念碑をめぐる状況の分析から、一九世紀から現代にいたるドイツ史をとらえ直した松本彰『記念碑に刻まれたドイツ——戦争・革命・統一』[3]である。ここで強調しておきたいのは、記念碑に関する研究は、彼のそれまでのドイツ統一研究、市民研究などを、[4]広く文化史の問題意識と関係させるなかで、構想されてきたことであろう。本特集でコメントをお願いした松本の記念碑研究は、欧米の研究に追随したものではなく、日本の近現代ドイツ史研究が生み出した独自の成果として評価されるべきである。

この研究を都市史のコンテクストのなかに位置付けるために興味深い論点を提供するのは、ケルンの大聖堂に関する部分[5]であろう。この大聖堂は、中世以来塔が完成しない状態で永らく放置されていたが、一九世紀になって完成に向けての機運が盛り上がり、現在の姿になる。松本は、たもとの鉄橋の歴代君主像も含めて、ケルン大聖堂をホーエンツォレルン家のプロイセンによるドイツ統一の記念碑としてとらえて、分析をおこなっている。それに対して、棚橋信明「三月前期の自発的結社としてのケルン大聖堂建設協会」[6]では、同じケルン大聖堂完成に向けての

動きがとりあげられ、その動きの分析からケルンの市民の動向が探られている。ここで両者の議論にふれているのは、この二つの論点が別に対立しているわけではなく、ほぼ同じ時期の同じ建造物をめぐって多様なアプローチが可能であることを示そうとしているからにほかならない。

こうした点を少し別の観点から論じるために、第二次世界大戦中にドイツの大都市で建造された高射砲台についてふれたい。大戦中に防空上の必要性から建てられた高射砲台は、大戦後解体することもできず、そのまま屹立し、あるいは、ベルリンのように、崩壊したまま放置されることになる。こうした高射砲台のうちここではハンブルクの二つの高射砲台の再利用についてとりあげる。よく目につく市の中心の高射砲台も現在では再利用されているが、ここでは周辺地域とのかかわりをより具体的にみることのできるヴィルヘルムスブルクの高射砲台をとりあげる。ヴィルヘルムスブルクは、その最寄り駅まで中央駅からSバーンで一〇分程度の乗車で到着するが、エルベ川沿いの地域のため土地が低く、洪水の被害にあいやすいため居住地域として適さないようになり、近年では住民の多くはドイツ人以外となっていた。

ところが、近年ハンブルクにおける住宅需要の増大にともない、市の中心部に近接しているこの地域の再開発が進んだ。ハード面では、増水に強い住宅設計についての様々な実験、あるいは住宅の新築や改築がおこなわれ、ソフト面では様々な文化事業による外国人のドイツ社会への統合が図られ、現代の需要にマッチした街づくりが進められている。

位置からみて港湾防衛のために作られた高射砲台も、戦後はそのままで放置されていた。地域全体が衰退していくなか、放置された高射砲台が建っていた光景は、かなり荒涼としたものであったろうと想像にかたくない。地域が再開発の対象となるにともない、この高射砲台は、発電施設や温水貯蔵タンクといった施設が備わったエネルギー供給基地に改造され、地域の再開発のなかで重要な役割が割り当てられている。[7]

同じ建物が、置かれた状況の変化のなかでその意義が変化していった好例といえる。建物そのもののみならず、そうした状況や意義の変化を分析することで建築物は歴史分析の対象となりえるのである。

本特集の土台となったシンポジウムの後で訪問した、フンデルトヴァッサー設計の大阪市のごみ処理場と下水処理場は、大阪へのオリンピック誘致の一環として建てられたもので、主会場となる舞洲へ入る際の門のような機能をあたえられていた。オリンピックを誘致できなかったため、これらの建物のそうした機能は宙ぶらりんのものとなったが、舞洲に隣接する夢洲を会場とする万国博覧会（二〇二五年開催予定）の会場整備に向けて、フンデルトヴァッサーの建物は、何らかの機能が割り当てられることになるのかもしれない。安治川トンネルは、旧淀川の河口近くで船の交通量が多く橋を架けられなかったため河底にトンネルが建設され、第二次世界大戦中の一九四四年に完成したものである。当初は自動車も通行できたが、一九七七年に車両用エレベーターは閉鎖され、現在では歩行者や自転車だけが通行できるようになっている。二〇〇九年にはトンネルのほぼ真上を阪神電車が走るようになった。施設も景観も変化したが、安治川の両岸をつなぐ機能には変わりない。

以上のような問題関心のもと、本特集では一九二〇年代から六〇年代にかけて大きな影響力をもったモダニズム建築を介したドイツ都市史の試みをおこなう。モダニズム建築とは、石、木材、レンガを主な建材とした従来の建築物に対して、コンクリート、鉄、ガラスを多用した建築物で、直線的なデザインを特徴とする。[8]

このモダニズム建築の特質を倉方論文が端的に明らかにしている。本

特集の北村、芦部、および松本による論考は、倉方論文が試みている、二〇世紀の建築の発展の図式も念頭に置いて執筆されている。ここで、筆者なりの理解に基づき倉方論文の議論を整理しておきたい。

倉方論文は、二〇世紀の建築様式の変化を、「機能」と「連想」の概念を用いて、「プレモダン」、「モダン」、そして「ポストモダン」の三段階に整理している。一九二〇年代までの「プレモダン」の様式主義建築においては、建物に求められたのは「機能」と「連想」である。そのため「プレモダン」の建物には、記念碑としての性質が備わる。一九二〇年代から一九七〇年代の「モダン」の建築はモダニズム建築である。この時期の建物では「機能」の面が前面に出てくる。そのため、「記念」の要素は背後に退き、建物は「構築物」になる。こうしたモダニズム建築への反動として生じた「ポストモダン」の建築は、「機能」と「連想」の両方を担うようになる。

このように建築のあり方が変化するにつれ、「近代建築」という言葉が指し示す範囲も変化する。「近代建築」は、戦後から一九七〇年代までは近代的な建築としての「モダニズム建築」をいい、現代は近代の建築としての幕末以降、明治・大正・昭和戦前期の建築を意味するようになっている。

倉方論文では、大阪の「プレモダン」、「モダン」、そして「ポストモダン」の建築が紹介されている。巡検の際に訪れた建物に限定すれば、「プレモダン」が中之島図書館と大阪市中央公会堂、「モダン」が大阪市立大学の学舎と安治川トンネル、そして「ポストモダン」がフンデルトヴァッサー設計のごみ処理場である。

2　建築からドイツ史を語る

本特集が試みるモダニズム建築を介したドイツ都市史の試みは、次の三つのコンテクストで近現代ドイツ史研究に意義をもちえる。

第一に、モダニズム建築が、一九二〇年代から六〇年代までドイツ、あるいは欧米の住宅建設において中心的役割を果たしており、二〇世紀半ばの都市史を構成する重要な要因となっている。

第二に、モダニズム建築がもっている国際的経緯を指摘したい。それは次の二点についてである。第一点目が、モダニズム建築は、建築様式として国際的影響力をもちえたことである。日本についていえば、第二次世界大戦前では、同潤会アパートという例外をのぞくと住宅建設には用いられなかったが、公共建築にモダニズム建築がとりいれられた。一九三〇年代に建てられた大阪市立大学のいくつかの建物など大学の学舎もその例である。戦後になると日本でも、団地という形でモダニズム建築が住宅建築に重要な役割を果たすようになる。[9] 大戦後に日本にとどまらず世界的に住宅建築の主流にモダニズム建築は位置づけられるが、こうした動きの一端を支えたのが、ナチス政権のもと多くの建築家が亡命したことであろう。

これが第二点目である。北村論文があつかうブルーノ・タウト（一八八〇‐一九三八年）は、三三年に日本に亡命し、日本文化論の仕事を残し、三六年に亡命先をトルコに転じると、中等教育や高等教育の校舎建築に従事し、当地で客死した。[10] グロピウスやミース・ファン・デア・ローエは、アメリカに亡命し、その地で建築家として活動する。[11] 芦部論文で言及されるエルンスト・マイは、一九二〇年代にフランクフルト・アム・マインでのジードルング建設に従事したのち、ソ連での活動

を経て、三四年からアフリカを活動の場とする。マイは、五四年に帰国しハンブルクなどで住宅建設に従事することになる。ナチス政権の誕生とともに、ドイツの建築家たちは様々な国際的契機のなかで活動していくことになるわけである。

第三に、近年、一九四五年五月の降伏を「零時」とし、がれきの山から戦後ドイツが再出発したという歴史観の問い直しがおこなわれている。戦前・戦中と戦後の断絶ではなく、ドイツ史のより大きな流れのなかで戦後史の出発をとらえなおそうというものである。[12] そうした観点で研究を進める際に問題になるのは、「零時」直前の時期の状況が、戦闘の状況や空襲の被害などをのぞけば、史料状況のありかたから十分明らかにできないことであろう。結果として、様々な社会制度が戦争末期の混乱のなかでどの程度崩壊したのかが測りがたく、「零時」の出発点においてドイツ社会が現実にどのような状況を利用できたのかが不明である。その点でも建築物が手掛かりをあたえてくれると考えられる。

まず、すでに紹介したラッドは、空爆によってもベルリンの地下にあるライフライン、たとえば、上下水道、ガス、電気、さらに地下鉄などはほぼ無傷であったと指摘している。[13] 地下レベルで戦前戦中から戦後にかけての連続性がみられたことになる。ベルリンでは一九世紀中葉以来営々と積み上げられてきたこうした地下のネットワーク[14]が存続していなければ、戦後の都市社会の復興はもっと時間がかかったと思われる。モダニズム建築による住宅も、こうしたライフラインを前提としたものであり、戦後もモダニズム建築が住宅建設に大きな役割をはたし続けることになる背景には地下レベルの連続性を想定して間違いない。

次に、終戦直後のベルリンをがれきの山としてとらえることについてもラッドは疑問を呈している。[15] 空襲など連合軍の攻撃に市内の地域ごとに偏差があり、中心に近い地域はがれきの山と化したとしても、郊外にはそれほど大きな損傷をこうむらなかった地域がある。北村論文でとりあげられるタウトの建築物も、第一次世界大戦前の、彼の活動の初期に建てられた建物の多くは市の中心近くにあり、ほぼ壊滅している。それに対して一九二〇年代後半に建てられたタウトの建築物は郊外に位置しているが、決定的に損傷していない。[16]「がれきの山」というイメージから喚起されるよりも、建築物次元での連続性が想定できるのである。

最後に、こうした連続性は想定できても、戦後社会のなかで建築物の置かれた状況が変化している点を指摘したい。[17] 新たに建てられた建物についてみると、戦後ベルリンのモダニズム建築は、より徹底した経済性や合理性に基づいたものになる。それが顕著に表れているのが、東ベルリン郊外のマルツァーンといった地区に建てられた高層住宅群であろう。[18]

西ベルリンのほうでは建築可能な土地が限定されていることもあり、類似の試みもはそれほど見られないが、ここでとりあげるべきは、ティーアガルテンの北のハンザ地区であろう。一九五七年に建設され、三五軒からなるこの建物群の設計には、グロピウスや、ブルーノ・タウトの弟マックス・タウトのような戦前から活動してきた建築家に加え、若い世代の建築家も関与し、戦後の建築のあり方の実験の場となっている。ハンザ地区は、戦後復興が一段落し、戦後の新な住宅建設のあり方が模索されたこの時期に、モダニズム建築の新しい方向性を示唆したものといえるが、また東西ベルリンの境界に近いところに位置し、その場所から西側社会の、東側への宣伝塔の機能も果たしていた。[19]

他方、既存のモダニズム建築についてみると、たとえば、東西ベルリンに散在していたタウトの住宅は建築当初は設計通り様々な彩色が施

されていたが、戦後は彩色は維持されず、褪せるに任せていた。[20] 合理性や経済性が前面に出ると、彩色の管理には関心が向かないということなのであろう。

以上のような関心のもと本特集では、日本の動向もふまえ、一九二〇年代から六〇年代にかけての都市史の動向を建築という観点からとらえていく手掛かりを検討していきたい。

問題提起の最後に、二〇一六年に翻訳されたアンドレアス・ベルナルトの『金持ちは、なぜ高いところに住むのか――近代都市はエレベーターが作った』[21] にふれたい。一九世紀ベルリンの賃貸兵舎において、敷地の奥まで入り組んで建物が建てられ、錯綜した状況になっていたのに対して、二〇世紀になってエレベーターによる都市空間構造の変化を指摘している。すなわち、階段の昇降にともなう各階の機能や社会階層の相違が消滅し、階ごとの部屋や住居の配置もエレベーターを軸に整頓されていくことになった。本特集では十分展開できないが、こうした建築にかかわる技術の進展が都市空間の変化にもたらす側面にも今後注意を払うべきであろう。

注

（1）都市史研究の動向に関しては、拙稿「近現代ヨーロッパにおける都市と住宅をめぐって」『西洋史学』二五三号、二〇一四年参照。

（2）Brian Ladd, *The ghosts of Berlin : confronting German history in the urban landscape*, University of Chicago Press 1997. 二〇一八年、本書刊行後二〇年間のベルリンにおける建築物をめぐる問題をあつかった章を加えた新版が刊行された。

（3）東京大学出版会、二〇一二年。

（4）たとえば、松本彰「ドイツ『市民社会』の理念と現実――Bürger概念の再検討」『思想』六八三号、一九八一年、同「『ドイツの特殊な道』論争と比較史の方法」『歴史学研究』五四三号、一九八五年、同「市民社会と国民国家、そして戦争――ドイツ近代史における Bürger」『Quadrante』一〇号、二〇〇八年など。

（5）松本前掲書、六〇‐六三頁。

（6）『西洋史学』二四〇号、二〇一〇年。

（7）近年のハンブルクにおける居住地再生事業全般については、大場茂明「再都市化の進行にともなう地区居住施策の展開――ハンブルク大都市圏を事例として」『日本都市学会年報』五〇号、二〇一六年参照。大場茂明を研究代表者とする大阪市立大学の日独国際共同研究プロジェクト「『住みごたえのある町』をつくる――大阪・ハンブルクにおける市民文化に基づくエリアマネジメント――」にもとづき、筆者も参加したヴィルヘルムスブルクの見学については www.lit.osaka-cu.ac.jp/user/oba/inspection2011.html を参照（二〇一九年一月二九日閲覧）。

（8）ピーター・ブランデル‐ジョーンズ『モダニズム建築――その多様な冒険と創造』（中村敏男訳）風土社、二〇〇六年。

（9）日本のモダニズム建築の展開については松隈洋著『モダニズム建築紀行――日本の戦前期・戦後一九四〇～五〇年代の建築』六耀社、二〇一六年、および同『モダニズム建築紀行――日本の一九六〇～八〇年代の建築』六耀社、二〇一六年。

（10）タウトの経歴および研究史については拙稿「ブルーノ・タウトに関する研究の動向」『史林』一〇〇巻三号、二〇一七年参照。

（11）戦時中のモダニズム建築家の置かれた状況についてはブランデル‐ジョーンズ前掲書参照。

（12）高橋秀寿『時間／空間の戦後ドイツ史――いかに「ひとつの国民」は形成されたのか』ミネルヴァ書房、二〇一八年、第一章を参照。

（13）Ladd, *op. cit.*, p. 176-177.

（14）ベルリンにおけるライフラインの整備については拙著『ドイツ住宅改革運動――一九世紀の都市化と市民社会』京都大学学術出版会、二〇〇七年、六六‐六九頁参照。

（15）Ladd, *op. cit.*, p. 178.

（16）ベルリンにおけるタウト建築を体系的に紹介した Deutscher Werkbund Berlin e.V. (Hg.), *Bruno Taut. Meister des farbigen Bauens in Berlin*, Berlin 2005 を参照。

（17）戦後のドイツ連邦共和国の住宅の展開については、ティルマン・ハーランダー「二〇世紀後半ドイツ連邦共和国（西ドイツ）における住宅と都市の発展」（北村昌史、長尾唯、前田充洋共訳）、中野隆生編『二〇世紀の都市と住宅――ヨーロッパと日本』山川出版社、二〇一五年参照。

（18）Ladd, *op. cit.*, pp. 190-192.

（19）Stefanie Schulz/ Carl-Georg Schulz, *Das Hansaviertel - Ikone der Moderne. 50 Jahre Interbau*, Braun Publishing AG 2007.

（20）Deutscher Werkbund Berlin e.V. (Hg.), a.a.O.

（21）（井上周平、井上みどり訳）、柏書房、二〇一六年。

（きたむら　まさふみ・大阪市立大学教授）

ブルーノ・タウトのジードルングと大阪市立大学のモダニズム建築群

北村昌史

1　はじめに

本稿[1]は、趣旨説明をうけて、まず一九二〇年代にベルリンで建設されたジードルングについて、ブルーノ・タウトのものを中心にふれる。次にタウトの建築物と大阪市立大学の一九三〇年代に建てられた学舎を対比し、モダニズム建築を国際的コンテクストのもとに置く。そのうえで、最後に、タウト建築が第二次世界大戦後に置かれた状況を概観する。

「モダニズム建築」は、一九一〇年頃からはじまり、大体一九七〇年代でいったん終わりを見せた建築様式をいう。モダニズム建築の特徴としては、コンクリート、鉄、ガラスを多用する点があげられる。第一次世界大戦前までのヨーロッパの建物は木、石、レンガなどを使っていたのに対して、新しい建築材料が多用されていた。鉄筋コンクリートなので、いうまでもなく木の枠を造って、それにコンクリートを流し込んで造ることになる。そのためモダニズム建築には直線が多くなっていくという特徴が指摘できる。一九二〇年代のヨーロッパ、アメリカでは、大衆のための住宅建設という「機能」に特化して、モダニズム建築による多くの住宅が建てられた[2]。

モダニズム建築の代表的な建築家は、ル・コルビュジエ、ライト、ミース・ファン・デル・ローエ、グロピウスの四人である。普通は三大建築家と呼ばれ、最初の三人をいう。それにグロピウスを入れて四大建築家。ル・コルビュジエ（一八八七‐一九六五年）はスイス出身で、フランスで活躍し、二〇世紀的な集合住宅のいろいろな試みをした人といえる。ライト（一八六七‐一九五九年）はアメリカ出身の建築家である。ミース・ファン・デル・ローエ（一八八六‐一九六九年）はドイツ出身の建築家だが、ナチスが政権をとった後しばらくしてアメリカに亡命した。グロピウス（一八八三‐一九六九年）も同じで、ドイツの建築家であるが、アメリカに亡命していった人である。

2　ブルーノ・タウトのジードルング

本稿であつかうブルーノ・タウトについてはこの三〇年ほどで再評価が進んでいる[3]。その象徴的出来事は、二〇〇八年に彼が設計に従事した四ケ所をふくむ、六ケ所のジードルングが、「ベルリンのモダニズム集合住宅群」としてユネスコの世界文化遺産に登録されたことである。ジードルングというのは、当時のドイツ語で住宅街のことをいう言葉である。タウトの設計した四ケ所とは、ファルケンベルク、馬蹄形ジードルング、シラーパルク、そしてカール・レギーンである[4]。

タウト[5]は、一八八〇年にケーニヒスベルクに生まれた。モダニズム建築を作り出した新しい傾向の建築家の多くは一八七〇～一八九〇年代に生まれており、タウトもその世代に属している[6]。一九〇八年にベルリンで開業する。大戦前の代表的作品は、ベルリン南東部のファルケンベルクで、当時のヨーロッパでよく見られた田園都市風の建築物である。第一次世界大戦が勃発すると、基本的には建築家としての仕事はなくなる。

戦後になり一九一九年、マクデブルクで建築顧問官という役職に就いて、都市計画の責任者になった。ただし、この当時のドイツの経済は崩

壊していたので、ほとんど何もできなかった。唯一評判をとったのは、本人の趣味ではないものの、街の中心部と郊外にある建物にめちゃくちゃな色を塗らせたことである。街の中心部の建物は、第二次世界大戦の爆撃でひどく壊されてしまったので残っていないが、郊外の住宅は残っていて、現在、当時の彩色を再現している。

一九二四年にベルリンに戻り、ベルリンの住宅建設に従事し、一万二〇〇〇戸の集合住宅の部屋を設計した。当時のベルリンで、住宅政策のなかで建てられた住宅の数が約一三万であったので、一割弱をタウトが設計したことになる。

この時期、大戦前の田園都市の装飾的要素は次第に後退し、モダニズム建築によるシンプルな建築へとタウトの設計も変化していく。この時期のタウトのジードルングは、次の四つの類型に分類できる。第一のものが、開発の進んだ地域の空いた土地区画に建てられた、おおむね一つないしは数軒の建物だけの集合住宅である。第二のものが、カール・レギーンやシラーパルクのように、複数の集合住宅のみからなる大規模ジードルングである。第三は、二戸一や連接住宅など二戸建てに近い構造の建物からなるジードルングである。そして、第四は、集合住宅と連接住宅を組み合わせた大規模ジードルングであり、馬蹄形ジードルングをその例としてあげることができる。[7] こうした建物が、ベルリンの北西、北東、南東、そして南部を中心に三〇数ケ所建てられた。[8]

全部確かめたわけではないが、これらのジードルングでは住民による協会設立の試みがみられ、こうした協会主催で祭りが開催されるようになる。[9] たとえば、筆者の調べたベルリン南西部の森のジードルングでは、一九二七年の最初の住民の入居直後から住民集会を組織する動きがあり、一九二八年の早い段階で住民の組織としてツェーレンドルフ・フィシュタールグルント居住者協会が結成された。フィシュタールとは、森のジードルングの建設とほぼ同じ時期に整備された公園のことである。

この協会は、一九二九年から一九三二年まで毎年フィシュタールの祭を開催している。この祭りは、青少年のための施設を建設することを直接の目的とする。この祭りには森のジードルング住民が参加したのみならず、周辺地域やベルリン社会全体から見物人が押し寄せた。三三年のナチス政権の成立にともない、開催主体である居住者協会が強制的画一化により解散させられることになったので、同年以降は開催されない。

以前論じたことがあるが、この祭りには森のジードルングをめぐる対立のベクトルを解消する目的があった。まず、南西部の邸宅の多い地域に建てられたため、この大衆向けの住宅地は、住民や行政から抵抗感をもたれた。次に、ヴァイマル共和国の建築界を二分した屋根戦争に巻き込まれた。森のジードルングは、新しい傾向の陸屋根によって建てられたが、伝統的な屋根を擁護する建築家たちが、隣接した土地に切妻屋根のフィシュタールのジードルングをたてた。屋根の形にとどまらず、建築を担当した会社の背景にある政治的立場が絡んでくる。[10]

タウトの経歴に戻ると一九三二年にモスクワに移る。大恐慌になり、建築家の仕事がなくなってしまったので、恐慌がないという噂のソ連に行ったのだが、ソ連の仕事の進め方や、要求されていることとの折り合いがつかなくて、ほとんど仕事をしないまま一九三三年にドイツに帰国することになる。

その直前にナチス政権が誕生したのであるが、ナチス政権に近い人物から「あなたはブラックリストに載せられています」と伝えられた。なぜブラックリストに載っているかというと、ナチスがモダニズム建築を嫌ったからである。結局、一九三三年、日本に亡命を余儀なくされる。

その後、日本では建築家としての仕事が全然回ってこなかったので、日本文化論の本[11]を書いて、それらは現在でも読み継がれている。一九三六年、トルコに移住し、建築家としての仕事をしたが[11]、無理がたたったのか、一九三八年に亡くなる。五八歳であった。

3　大阪市立大学のモダニズム建築群

さて、国際的なモダニズム建築の発展の動きのなかで、大阪市立大学の杉本キャンパスが整備されていく。一九三〇年代前半に何もなかった杉本キャンパスが整備されて、一号館、二号館、三号館、体育館、そして図書館が建てられる[13]。

大阪市立大学の一号館が、竣工したのは一九三四年で、その前年に二号館が建てられ、これらはまだ使われている。一九三三年に建てられた三号館は十数年前に老朽化で壊され、現存していない。二号館と三号館の間に体育館がある。この三つの建物は、一号館から少し離れた場所に立っている。図書館は、一号館のそば、正面からみて左側に直角方向に建っている。図書館の後ろに書庫がある。

大阪市立大学のキャンパスを設計したのは伊藤正文という、大阪市の土木建築課に勤めていた人物である。この人は早稲田大学を出て、大阪市に勤めていた。大阪市立大学に縁が深く、戦後の一九四九年に大阪市立大学家政学部（現在、生活科学部）の教授に就任する。彼の設計で有名で現在も使われているのは、大阪の天王寺にある大阪市美術館である。

伊藤は、モダニズム建築を日本に導入していこうという動きのなかで活動していた。その動きの表れが日本インターナショナル建築会という一九二六年に作られて一九三三年に解散する団体である。伊藤は、この団体の一員であった。この団体が、モダニズム建築を日本にも導入しようという試みを盛んにおこなった。雑誌を刊行し、日本人の会員だけでなく、海外の会員を募っていた。形だけだろうが、グロピウスやブルーノ・タウトなどが海外会員として参加している[14]。

タウトは一九三三年、日本に亡命してくる。日本インターナショナル建築会の人が、ドイツにいられないなら日本に来てもらえないかと呼んだからである。

これから大阪市立大学の建物とブルーノ・タウトの建物を比較してみる[15]。まず両者の類似性を指摘していく。ただし、似ているというのはどのような理由なのか、具体的に伊藤が設計したときの考えが残されているわけではない。そのため、タウトの設計した建物というのは一九二〇年代に盛んに日本に紹介されていたが、それを見て取り入れたのか、それともコンクリートを使った建物を建てると大体同じような発想で建物を造ってしまうからなのかわからない。

コンクリートの建物は、下手をすると極めて単調な箱にしかならない。一九二〇年代ではタウトだけでなく、モダニズム建築を営んでいる建築家も、どうやってアクセントを付けるかということをいろいろと考えていた。その際、工法の工夫により建物に変化をつけようとする。

たとえば、公共施設などでピロティと呼ばれる空間がつくられる。一階の部分を上に上げて、そこは広い空間にして、上の方は普通の構造物にするようなことが考えられたのがこの時代なのである。もっと単純に円や斜線を建築デザインのなかに入れることも試みられている。

写真1　円や斜線を取り入れたデザイン

シェーンランク通り（1926-1927）

写真1右は、タウトの設計した建物で一番手の込んだ部分で、一番説明しやすいものである。ちなみにモダニズム建築家のなかでのタウトの一番大きな特徴は、色にこだわったことである。普通、モダニズム建築家は建物を白か灰色にするのであるが、彼は青、緑、黄色などの色を積極的に塗っていく。

この建物の赤いところが階段室になっているが、その脇が微妙に斜めになっている。木枠を斜めに置けばいいだけであるから、簡単にできるわけだが、同じ工夫が大阪市立大学の時計台の脇のこの部分でも施されており、斜めになっている（写真1左）。これは、時計台のもつ奥行きや存在をはっきりさせるための工夫だと思われる。

ただし、この部分の教室は若干使いづらい。教室のなかが斜めに切られており、斜めの椅子や机があるわけではないので、四角で置くことになる。すると、一番奥は非常に通りづらい配置になってしまう。建物の外だけを考えて、なかを考えていない。

それから、両翼のそれぞれなかより、壁面の一番上のほうにベランダのようなものを丸く造って、直線だけにしないようにしている。この下に、各階ごとにベランダがあるわけではなく、しかも雨よけにもならない。曲線を入れるためにわざわざ作っているわけである。建物の側面にも丸いベランダが造られているが、実をいうと飾りだけのベランダで、建物のなかから出られない。

タウトの代表的な建築の一つで、世界文化遺産になっている馬蹄形ジードルングがある。馬蹄形というのは、馬のひづめの形をした構造物を中心にして住宅街を造ったから付けられた。馬蹄形であるから、建物の側面が微妙に曲がっている。これと同じような工夫が、実は大阪市立大学の建物に反映されていることになる。

他にも、デザイン上の工夫がいろいろ試みられていて、これが大阪市立大学の建物にも共通している。タウトの集合住宅のなかには、建物の前面を、真っすぐにすると単調になるので部分部分を前後させて、街並みの線をあえて凸凹させているものがある。シラーパルクといって、これも世界文化遺産になっている建物では、コンクリートで造った上にレンガを張っているが、レンガであるので、どちらかといえば横の線が強

写真２　デザイン上の工夫

ライネ通り（1925-1928）

シラーパルク（1924-1930）

調される。そうしたところにあえて、ベランダに何の意味もない縦の構造物を入れるとか、窓枠に白い縦の線を入れるという工夫をしている（写真２）。

大阪市立大学の一号館も似たようなことをしている。まず、両端の部分で、建物が前面に少しずれている。前にずれている部分には大きな教室がもうけられている。次に、時計台の脇の部分では窓の脇に縦の構造物がもうけられて、縦の線を強調している。これは時計台の高さを強調するためのものと思われる。建物の両端のほうは横の線がずっと入れてある。これは、横の線を入れることで広がりを示すような工夫をしているわけである。

それから、階段室である。一号館の時計台もそうだが、タウトの集合住宅も階段室をきれいに造っている。上から下までガラス窓を並べている。これが可能になったのは、実はモダニズム建築の時代が初めてである。レンガ、石、木の時代は構造計算がしっかりできないので、ガラスというもろい建材に力がかからないように造れるかどうかわからなかったからである。それで階段室がモダニズム建築の象徴の一つになっている。共有のスペースの透明性を確保していこうということであろう。

写真３　建物の角

旧書庫

カール・レギーン（1928-1930）

建物の角の処理についてもふれておく（写真３）。これも構造がしっかりと計算できるからできる芸当である。カール・レギーンというのはタウトの代表的な建物の一つであり、これも世界文化遺産になっている。建物の角のところに窓を直角に造ることで、装飾性を高めるような工夫をしているのだが、実は大阪市立大学の建物でも、同じ工夫がされている。旧書庫の階段の踊り場のところが、このように直角に窓ガラスが造られており、同じような印象を得るような構造物になっている。直角に組み合わされた窓から左のほうには、縦の構造物をはさんで、各階に四角と丸い窓が配置されている。その結果、書庫のこの面は、市大の建物の中でもかなり装飾的

なものとなっている。

カール・レギーンの角の部分というのは、元々どういう構造物なのかというと、空間的に突き出ているという点で、象徴的な場所として造られている。道路に囲まれたブロックを「ロ」の字型で囲まないで、「コ」の字型にして、一面だけ空けておく。その結果として突き出た部分が、通りのこちら側に六つ、反対側には七つ並んでいる。四角い構造物を突き出しただけでは単調になって面白くないので、直角に窓を組み合わせ、ベランダを突き出す形に作ってある。その結果、通りから見たら非常に近未来的な楽しい空間が出来上がっている。

旧書庫のこの壁面も、空間的に突き出ており、同じ機能が期待されている。ただし、大学に入ってきた人に対して空間的に突き出ているのではない。正門から入って見ても、旧図書館に遮られていて見えない。これが本来見えるのは、一号館の教室からということになる。この面は、一号館から直角に造られており、そのため教室ごとに見える光景が違ってくる。この建物に一番近い所から見ると、装飾的な壁は見えなくて、踊り場の窓の一号館側だけ見える。一番遠い所では、壁の全体が見えるという仕掛けになっているのではないかと思うのである。

他方、モダニズム建築の日本と欧米における相違も言っておかなければならない。第一に、窓の上の庇である。これはヨーロッパ、すくなくともタウトの建物ではこのようなものは造られない。多分、雨に対する感覚の違いだと思われる。第二に、基本的に日本では、こういう建物は公共建築を中心に建てられる。ヨーロッパでは主に集合住宅に使われていた。実をいうと日本の住宅建設に団地という形でモダニズム建築が影響を与えだすのは、第二次世界大戦後になってからである。

同じ「モダニズム建築」が欧米と日本で現れ方が違うのはなぜなのかという問題を考えるためには、結局、ヨーロッパと日本の住宅や建物を支える要因が全然違うということを指摘しなければならない。日本は基本的にこの当時まで木造の長屋式なので、そこから何階建てかの集合住宅まで話が飛んでいくのはちょっと距離があるという問題も指摘できよう。実は住宅を考える上でより大事なのは、ヨーロッパやアメリカでは各種ライフラインの整備がモダニズム建築による集合住宅を支えていたということである。

たとえばベルリンでは、ガスが整備されたのは一八二五年である。上水道は一八五四年、下水道は一八七六年、電気は一八八四年に整備されていく。[16] 他のヨーロッパの大都市も似たようなものである。

一九世紀の初頭の段階では、薪や油をどこかから手に入れて、自力で下からもっていって、暖炉で燃やしたり、ランプをつけたりした。水も下でくんでくる。エレベーターが住宅に使われるようになるのは二〇世紀になってからであるから、[17] 一九世紀では階段を使って人力で運ぶことになる。

トイレはなく、簡易便器に用をたす。排泄物は窓から出したのであろう。これでもよかったのはなぜかというと、ヨーロッパは空気が乾燥しているので、多分、耐えられたのだろうということと、街のなかに家畜などがたくさん放し飼いにされていたので、路上に糞尿があっても、不思議ではないということなのだと推測できる。[18] とはいえ、人口増加にともなって建物の構造が変わらざるをえなくなる。[19]

ベルリンで一九世紀前半に造られた建物では、一つの階に三軒ぐらいの住宅が入っており、通例高さが四階までである。ベルリンの一九世紀後半になると、道路に面した建物だけではなく、敷地の奥にも住居用の建物が建てられる。建物がいくつも並んでいるので、道路に囲まれて

いるブロックのなかにたくさんの建物が建て込んでいるという特徴がある。一つの階で十数軒入っている。これを「賃貸兵舎」という。

一九世紀前半の建物は、一つの建物で大体一二軒ぐらいなのに対して、一九世紀後半になると一階で十数軒、建物の大きさが違うので簡単に比較はできないが、これが五階建て、六階建てになるので、ここに住む人数は、一九世紀の初頭に比べると五倍、六倍に膨れ上がっていく。それとともに人間が出す物も当然、五倍、六倍に膨れ上がるわけである。当初は上下水道はなかったので、トイレはまだなく、従来通り排泄物は処理される。そこで、とくに排泄物の処理に関して急速に限界が来て、耐えられなくなる。

こうした状況の背景にあるのは、公共交通機関がまだ都市内交通のために利用されていなかったことである。一九世紀末までは、徒歩が都市内交通の主たる交通手段であった。新しい住宅を人口増にともなって建てようとしても、結局、遠くには造れないため、元からあった街並みのすぐ外に、巨大な建物を建てて対応するしかなかったといえる。

こうした対応の限界が明らかになったので、急速にライフラインが整備されていく。一世紀前には鉄道など存在しなかったところへ、鉄道網が整備されていくとか、上下水道がなかったところに上下水道網が整備されていく。ガスや電気も導入される。

実は、このようなライフラインがあってはじめて大規模な建物が集合住宅として安定して造られるようになることを指摘したい。要は、鉄道で郊外の安価な土地とのアクセスがよくなる、スイッチを入れたら電気がつく、蛇口をひねったら水が出る、ガスの火がつく、出した物は下水道が運び出してくれるというものがあってようやく、五階建て、六階建ての建物で人々が安心して暮らせるようになる。モダニズム建築を現実に成り立たせていたのは、「プレモダン」の時代に構築された都市社会の仕組みである。建物の様式は変化しているが、そうした様式それぞれを成り立たせる社会的条件には連続性を指摘できるのである。

それに対して、日本では状況が異なる。[20] たとえば、大阪市では、電気は一八八九年、ガスは一八九七年、水道は一八九五年に作られた。[21] ただし、下水の整備が大幅に遅れて一九四〇年になる。これについては江戸時代以来の伝統で、人間が出した物は大事にして、農家にもっていって、農作業に使っていくというシステムが出来上がっていたことを指摘できる。費用の掛かる下水道の方が、後回しにされていたという事情もある。

大阪で初めての下水施設は、一九四〇年に作られた、西成区津守にある下水処理場である。逆にいえば、これより前の段階で、集合住宅で大きいものを日本に建てようということは、なかなかできなかっただろう。同潤会アパート[22]という、関東大震災の後に東京の方で造られたモダニズムの集合住宅の試みがあるが、これは例外であり、基本的には日本ではまだ、生活の面でも、ライフラインの整備の点でも、集合住宅をモダニズムで造っていこうという条件は出来上がっていなかったということになる。

津守下水処理場の最初の建物は、使用されていないが、現存している。モダニズム建築による処理施設の建物が建てられており、一番上の階には住居がある。風呂や共用のトイレもあり、当時は下水処理場の上であって初めてモダニズムによる住宅が可能であったといえる。[23]

4　第二次世界大戦後のタウトのジードルング

話を終戦後のベルリンに移そう。[24] タウトのジードルングは東西ベルリ

ンに散在したが、建物の色彩の管理などはなされず、また建物の多くは、建て増しなど改造される。

たとえば、森のジードルングを含むツェーレンドルフは、アメリカの占領地域に置かれた。森のジードルングの多くの住居でもとの住民が別の住居に移され、アメリカ軍関係者の宿舎になる。いつの時期か不明だが、アメリカ軍関係者が撤退した後、フィシュタールの祭は復活した。他方、タウトの森のジードルングの建物は、彩色も褪せるに任せ、また多くは改造されてしまった。

一九七〇年代から状況は変わる。タウトが設計した状態にジードルングの一部の建物を戻そうという動きが生じた。建築史家の調査に基づいて、どのように修復がなされるべきかについての交渉が住民と行政の間でなされた。同様の動きがほぼ同じ時期に馬蹄形ジードルングにもみられたが、タウトの再評価が本格化するのは、一九九〇年の東西ベルリンの統一以降といえる。それまで東西にわかれていたタウトのジードルングが実際に調査しやすくなったからである。

現在では、ベルリンではタウト設計の住居が一万戸程度残っており、その多くは当初の状態に構造も彩色も戻されている。とくに世界文化遺産の四つのジードルングは、厳格に管理されている。森のジードルングも、設計の通り建物を維持しようとしている。こうした変化は、「プレモダン」に建築が移行した時期に重なる。モダニズム建築の役割が終えたときに、「モダン」の時期には忘れられていた建築家に光が当てられるようになったといえる。

森のジードルングでは、タウト設計時点の姿をとどめ、設計者の想定した世界を享受でききる。とはいえ、そのおかれている社会的コンテクストは建設当時とは大きくちがう。

まず、「フィシュタールの祭り」と同じ名前の祭りは、フィシュタールの公園において、ツェーレンドルフ区の行政による青少年育成のための行事として開催されていた。参加するのは区にある青少年のための各種団体であり、住民の祭りという要素は消えていた。この祭りは、各種団体の活動の紹介という側面が強くなっている。かつては住民主体で、各種のベクトルを統合しようとした「フィシュタールの祭り」という名前を、二一世紀になるとヴァイマル期には統合される対象の一つであった行政側が利用しているといえる。

他方、住民は二〇一〇年に彼らの組織として鸚鵡ジードルング協会を結成し、様々な催しをおこない、住民独自の祭りを開催したこともある。協会は地域住民以外にも開かれているが、地域とその住民のために活動している。かつてのように住民の共同体を越え、ツェーレンドルフやベルリン社会とのつながりを求めようとしたのとはちがい、住民の共同体の維持ないしは活性化がその目的となる。

最後に、ユネスコの世界文化遺産「ベルリンのモダニズム集合住宅群」に森のジードルングを追加登録しようという動きがあった。二〇〇八年にツェーレンンドルフの区議会において追加登録に向けてアクションを起こすことが決議された。かつての「嫌われたジードルング」が、ツェーレンドルフやベルリン社会の側から古き良きヴァイマル時代を想起させる存在として認識されるようになったといえる。

現在では、森のジードルングのモダニズム建築やそこからの派生物は、もともとは様々な軋轢があったことは忘れさられ、当初から普遍的な価値をもつベルリン社会の財産として再認識されるようになっている。それは、七五年の歳月を経て、当時あった対抗の構図が消え去ってしまったことによるのであろう。森のジードルングは、かつてのような対立を

はらんだ世界ではなく、一つの通常の生活の場として、ベルリン・ツェーレンドルフ社会のなかで定着したのである。

タウトの近年の再評価も、古き良きヴァイマル共和国の記憶の問題と絡んでくる。タウトを今評価しようという動きの背景には、苦難に満ちたナチス期や戦後の分裂時代の前にあったヴァイマル共和国を、積極的に評価しようという視点があるものと思われる。しかも、一九三三年にドイツから亡命したタウトは、政権をとった後のナチスとの関係に関する疑惑から完全に自由といえる。結局は亡命したものの、亡命するまでの間、ナチスとの関係を求めたグロピウスやミース・ファン・デル・ローエとは状況がちがう。世界文化遺産に登録された六ケ所の集合住宅のうち四か所と、タウトの建物が多く取り入れられている背景には、こうしたベルリンの過去に対する記憶と忘却の問題が絡んでいるのかもしれない。

注

（1）本稿は、以下の拙稿の内容をシンポジウム・特集の趣旨に沿って再構成したものである。詳細な分析や典拠についてはそれぞれの拙稿を参照されたい。拙稿「ブルーノ・タウトのジードルングの社会史――『森のジードルング』を手掛かりとして」中野隆生編『二〇世紀の都市と住宅――ヨーロッパと日本』山川出版社、二〇一五年、拙稿「ブルーノ・タウトの集合住宅」尾関幸編『ベルリン――砂上のメトロポール（西洋近代の都市と芸術 五）』竹林舎、二〇一五年、および拙稿「嫌われた住宅地の社会史――ブルーノ・タウト設計『森のジードルング』」大場茂明・大黒俊二・草生久嗣編『文化接触のコンテクストとコンフリクト――EU諸地域における環境・生活圏・都市』清文堂、二〇一八年。

（2）ピーター・ブランデル - ジョーンズ『モダニズム建築――その多様な冒険と創造』（中村敏男訳）風土社、二〇〇六年。

（3）拙稿「ブルーノ・タウトに関する研究の動向」『史林』一〇〇巻三号、二〇一七年参照。

（4）Markus Jager, *Siedlungen der Berliner Moderne*, Deutscher Kunstverlag 2008.

（5）タウトの伝記研究としては Kurt Junghanns, *Bruno Taut, 1880-1938. Architektur und sozialer Gedanke*, 3., überarbeitete und erg. Aufl., Berlin 1998; Unda Hörner, *Die Architekten Bruno und Max Taut. Zwei Brüder - zwei Lebenswege*, Berlin 2012 がある。簡潔には前掲拙稿「ブルーノ・タウトに関する研究の動向」第一章参照。

（6）ブランデル - ジョーンズ前掲書のほか、彰国社編、五十嵐太郎他著『モダニスト再考――建築の二〇世紀はここから始まった　海外編』彰国社、二〇一六年。

（7）タウトのジードルングの類型分けについては、前掲拙稿「ブルーノ・タウトのジードルングの社会史」、二二九頁参照。

（8）拙稿「ブルーノ・タウトとベルリンの住環境――一九二〇年代後半のジードルンク建設を中心に」『史林』九二巻一号、二〇〇九年、九〇頁。

（9）ファルケンベルクの祭りについては Klaus Novy , Barbara von Neumann-Cosel(Hg.), *Zwischen Tradition und Innovation. 100 Jahre Berliner Bau und Wohnungsgenossenschaft von 1892*, Berlin 1992, S. 60-67、馬蹄形ジードルングの祭りについては Henning Holsten, Neues Bauen – Neues

Wohnen – Neue Feste. Vision und Wirklichkeit urbaner Gemeinschaftsrituale am Beispiel der Hufeisensiedlung in Berlin-Britz, in: Paul Nolte(Hg.), *Die Vergnügungskultur der Grossstadt. Orte, Inszenierungen, Netzwerke (1880-1930)*, Köln 2016、ベルリン北部にあるフライエ・ショレの祭りは Renate Amann/ Barbara von Neumann-Cosel, *Freie Scholle - Ein Name wird Programm. 100 Jahre gemeinnützige Baugenossenschaft "Freie Scholle" zu Berlin EG*, Berlin: Edition Arkadien, 1995 を参照。

(10) 前掲拙稿「ブルーノ・タウトのジードルングの社会史」、前掲拙稿「ブルーノ・タウトの集合住宅」、および前掲拙稿「嫌われた住宅地の社会史」。

(11) 和文で『ニッポン――ヨーロッパ人の眼で観た』（一九三四年）や『日本文化私観』（一九三六年）、そして離日直後に英文の *Houses and People of Japan*, Tokyo 1937 が出版され、トルコに移住後も、編纂ものであるが、岩波新書から篠田英雄訳で『日本美の再発見』（一九三九年）が出版されている。

(12) トルコ時代のタウトについては拙稿「トルコ共和国におけるブルーノ・タウト」『フェネストラ　京大西洋史学報』第二号、二〇一八年参照。

(13) 中嶋節子「大阪市立大学杉本キャンパスの近代建築について――近代モダニズム建築をめぐる一考察」『大阪市立大学生活科学部紀要』四八号、二〇〇〇年。

(14) この団体については、「日本インターナショナル建築会における伊藤正文の活動と建築理念について」『日本建築学会計画系論文集』五六六号、二〇〇三年など、笠原一人の一連の研究がある。

(15) タウトの建築物と大阪市立大学の学舎の比較は、すでに拙稿「日本の大学キャンパスからみた世界の歴史――関西学院大学西宮上ケ原キャンパスと大阪市立大学杉本キャンパス」『関学西洋史論集』四一号、二〇一八年で試みており、本章の叙述もそれに依拠している。本稿では写真の類は最小限にとどめたので、建物の写真については適宜同論文を参照されたい。

(16) ベルリンにおけるライフラインの整備については、拙著『ドイツ住宅改革運動――一九世紀の都市化と市民社会』京都大学学術出版会、二〇〇七年、六六‐六九頁参照。

(17) アンドレアス・ベルナルト『金持ちは、なぜ高いところに住むのか――近代都市はエレベーターが作った』（井上周平、井上みどり訳）、柏書房、二〇一六年。

(18) こうした状況から発する悪臭への感覚とその変化については、アラン・コルバン『においの歴史――嗅覚と社会的想像力』（山田登世子、鹿島茂訳）、新評論、一九八八年参照。

(19) 一九世紀ベルリンの住宅の構造の変化については拙著、七〇頁参照。

(20) 日本の排泄物の処理の歴史については屎尿・下水研究会編著『トイレ――排泄の空間から見る日本の文化と歴史 = Toilet』ミネルヴァ書房、二〇一六年参照。

(21) 電気とガスの導入年についてはウイキペディアの「大阪電灯」と「大阪ガス」の項目、上下水道について大阪市のホームページ参照。

(22) 橋本文隆、内田青蔵、大月敏雄編、兼平雄樹写真『消えゆく同潤会アパートメント――同潤会が描いた都市の住まい・江戸川アパートメント』新装版、河出書房新社、二〇一一年。

(23) 筆者がオルガナイザーになり、二〇一七年二月一七日におこなった国際セミナー「環境史・環境誌の中の合同生活圏」の際の、津守下水

処理場をはじめ、太閤下水や狭山池の見学の模様は、http://yakitori.lit.osaka-cu.ac.jp/user/seiyoshi/umweltgeschichtesymposium_inhalt/#more-1106 参照。水洗トイレのグローバリゼーションをテーマとするバーミンガム大学のフランク・ユーケッタの論考をふくむ、この国際セミナーの成果は、*UrbanScope*, 9, 2018 に掲載されている（http://urbanscope.lit.osaka-cu.ac.jp/journal/vol.009.html）。

（24）本章の記述は、前掲拙稿「ブルーノ・タウトの集合住宅」第三章の叙述を特集の枠組みに沿って再構成したものである。

（きたむら　まさふみ・大阪市立大学教授）

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

大阪の近代建築と変化する機能・連想

倉方俊輔

1　時代の変化の典型例としての「門司港レトロ」

大阪の「近代建築」の変化を述べる本稿の冒頭において、福岡県北九州市で一九八八年に始まった「門司港レトロ」事業に触れたい。この行政を中心に民間事業者も加わったまちづくり事業に、建築における「プレモダン」、「モダン」、「ポストモダン」の変化が典型的に現れていると考えるためだ。

門司港駅（一九一四年）を見よう。現在、二〇一二年に始まった保存修理工事の最終段階であり、二〇一九年三月には創業当時の威容が姿を表す予定である。門司港は一九一六年には出入港船舶数で横浜や神戸をしのぎ、日本一になった。栄華を誇っていた当時、一九一四年に門司港の玄関口として完成したのが門司港駅だ。戦前には駅舎の格付けがあり、それに応じて必要な規模や設備が定められていた。最上級の一等駅は一九二一年時点で、全国五四駅を数えた。門司港駅は、その一つである。その他の一等駅となると、現存しているのは、例外的な規模が与えられた東京駅（一九一四年）だけだ。

門司港駅は一九八八年に国の重要文化財に指定された。鉄道駅舎としては日本で初めてだった。東京駅の重要文化財指定は後年の二〇〇三年である。注目したいのは、重要文化財に指定された年と門司港レトロ事業の開始年が同じであることだ。同事業は第二次世界大戦後に港湾としての地位を失った門司港が、文化財指定を契機に観光化を図ったものだ。主体となったのは福岡県北九州市であり、この市の経緯そのものが、時代を色濃く反映している。高度成長期のまっただなかである一九六三年に、それぞれが近代工業の発達に伴って発展した門司市、小倉市、戸畑市、八幡市、若松市の五市による新設合併で誕生。三大都市圏や県庁所在地以外では初の政令指定都市となったが、高度成長期以降は政令指定都市の中の人口減少率や高齢化率において有名となり、近年は逆にそれを逆手に取ったリノベーションまちづくりの取り組みや住みやすさなどで、衰退する地方都市の一つのモデルとなっているのだから。

近代以前には寒村だった場所に、門司港が建設され、日本の工業化に伴って発展し、やがて工業という存在が都市の後景に退いて、同じ福岡県であれば商業都市の福岡市が人気の中心となって門司港も北九州市も衰退すると、そうした機能を超えたものを求める人々をターゲットとするようになる。

そこにおいて建築の扱いが変化する。現在「近代建築」と一般的に称されているプレモダンの建築がどのようなものとして存在しているかが変わってくるのである。

門司港は機能面だけでは解釈できないような立派さで作られ、それが幸か不幸か高度成長期以降に街が発展しなかったために国内でも貴重な現存例となり、やがて観光戦略の一環と位置付けられて、今そうした保存例の先駆として改めて本格的に保存修復を受けた。その他の門司港レトロ地区に含まれる建築も、同様の時流の中で推移してきた。

旧大阪商船門司支店（一九一七年）は灯台を思わせる姿が水面に映える。戦前の三大海運会社の一つである大阪商船が、当地に意匠性に優れた支店を開設していることに、近代に得た門司港の地位の高さが伺える。用途を失い、解体予定だったが、門司港レトロ事業で救われ、

一九九九年に国の重要文化財に指定された。

三井倶楽部（一九二一年）は、三井物産門司支店の社交場として建設された。本格的な洋館のつくりで、来日したアインシュタインなど多くの賓客が訪れたという逸話をしのばせる。これも解体予定だったが、一九九〇年に国の重要文化財に指定されて、一九九四年に現在の場所に移築保存、公開をスタートさせた。

戦後の高度成長期の中で、近代的でないとみなされて、ないがしろにされてきた建築が文化財として評価され、商業的な価値もまとっていく。そうした変化の中で、新たな建物も建設された。門司港ホテル（現・プレミアホテル門司港、一九九八年）は、アルド・ロッシの設計により、門司港レトロ事業の一環として完成した。ロッシは一九六〇年代から、機能性を重視するモダニズムに対し、それとは異なる視点を提示する理論家として世に出たイタリアの建築家である。一九七〇年以降は実作によっても知られるようになった。日本でも福岡市のホテル・イル・パラッツォ（一九八九年）などいくつかの作品を設計した。いわゆるバブル期の日本では、海外の有名建築家に建築のデザインを依頼することが流行った。ロッシもそうした時代のおける、ポストモダニズムないしはポストモダンの建築家の一人として国内では認識されていると言えよう。

以上、こうして北九州の一点から二〇世紀を中心とした時代の流れを概略していった。これらはどのように整理可能だろうか。

2　変化する機能・連想の概略

ロッシの主著である『都市の建築』（一九六五年、日本語訳一九九一年）[1]の中に、次のような一節がある。

「都市を考えるのに、建築の、ひいては都市空間の、発生的機能の体系の産物としてとらえるもの、今一つは、それを一個の空間構造として考えるものである。〈中略〉もとより私はこの後者の観点から出発する」。

彼の空間構造とは人々の記憶につながり、想念を喚起させるものである。都市とは機能主義で把握できるものではなく、記憶にまつわるのだと言う。

形の持つ連想効果を、第二次世界大戦以前の建築は重視していた。銀行は銀行らしく、倶楽部は倶楽部らしかった。世界とは西洋のことであり、世界とつながる都市は西洋的な顔を持っていなければならなかった。過去からの連想の効果がその中心にあった。当時は、過去の建築を「様式」で整理する思考が、それを保証した。様式にはそれぞれの性格がある。それは過去にどうであったかという事実（あるいは事実だと考えられているもの）からの連想を基軸にしている。新しく建つべき建物の役割や場所性に応じて、それを適切に選択したり、折衷したりする能力が一九世紀の建築家には求められた。そうした建築を「様式主義建築」と総称できる。世紀末になるとアール・ヌーヴォーやユーゲントシュティールといったスタイルが、ヨーロッパの先進都市で一世を風靡する。過去に縛られないデザインが時代に与えた影響は大きかった。とはいえ、それらも「様式」（スタイル、シュティール）という思考との連続性から始まっていた。

本シンポジウムのキーワードの一つが「記念碑」である。以上の時代

の建築はそれに相対的に近い。記念碑が記憶につながり、想念を喚起させるものだとすれば、形が西洋という共同体に対して有する連想を基軸とする様式主義建築もそのようなものだからだ。ただし、建築は機能を欠くことはできない。したがって「機能＋連想」の図式として、第二次世界大戦以前に主流だった建築を示すことができよう。

それに対して、一九二〇年代から明確な姿をとり、第二次世界大戦以後に世界の主流となるのは「モダニズム建築」と現在、呼ばれているものだ。「様式」に基づいた考え方の否定が、その大前提である。建築が何かの行為のために必要とされ、そうした目的のために物体を構築するものであるとすれば、そのこと自体に注力すべきであって、過去からの連想などに拘泥する必要はないという思考だ。モダニズム建築の特色は、様式主義建築など既往の建築観念に対する優位性を主張する際に、近代的、科学的なものであることを強調する点にある。先ほど様式主義建築を「記念碑」と関連させたのと同程度には、モダニズム建築は「構築物」に近づいた存在と言える。ただし、建築は形の意味をゼロにすることはできない。モダニズム建築では、形は機能の結果として説明される。しかし、実際には機能の表現であったり、機能を連想させたりするものであることも少なくない。良質の様式主義建築が決して行き着けない過去への憧れを原動力としてきたとしたら、意匠面におけるモダニズム建築の前進が、即物的な機能で形が決定される構築物へのロマンに後押しされた面が無いとは言えない。いずれにしても「機能」をキーワードにモダニズム建築は要約できる。

一九七〇年代以降に明瞭に認識されるようになり、一九七〇年代後半からポストモダンの動向は、建築においてはこうした機能主義からの脱却として説明されることが多い。モダニズム建築以前の時代の建築が、専門的および社会的な評価を全面的に受けるようになったのは、この時期である。並行して、狭い主義主張としてのモダニズムの乗り越えであるとして、建築の多様な形が提案されていった。それらが過去の再演であったりなかったりということ以上に重要なのは「連想」の効果を再び導入したことだ。ロッシの門司港ホテルと『都市の建築』によって端的に示したかったのは、このことである。門司港ホテルはもちろん機能的でありながら、その形は西洋の古典建築や魚、門といった個人的であり集団的な連想の産物である。それは『都市の建築』に通じる。「機能＋連想」の図式としてポストモダンの建築は示すことができよう。もちろん、モダニズムを経ているだけに、様式主義建築のような社会的、包括的な拘束力は無い。集団的な連想よりも、個人的な連想において優っている。様式主義建築が今、一般の人々にも人気だとしたら、それは後者の連想効果によるものと捉えられる。門司港レトロ事業はその走りであり、後段で述べる大阪の「近代建築」を中心とした近年の動きはその最新版である。

約～1920年代	プレモダン（様式主義建築）	機能＋連想	≒記念碑
約1920～1970年代	モダン（モダニズム建築）	機能	≒構築物
約1970～1990年代	ポストモダン	機能＋連想	

ここで「近代建築」という言葉に触れたい。「近代建築」という語は現在、開国以降に導入された意匠を伴って、第二次世界大戦以前に建てられた建築を指すのが一般的である。完全に和風に見えるものが除かれる以外は、近代（一八五四～一九五四）に建設された建築すべてが入る。価値判断を抜きにした時代概念として、ほぼ定着したとみてよいだろう。幕末から明治初頭の擬洋風建築や、大正末からのモダン・ムーブメントの建築も含まれるが、中核は歴史的な意匠に根ざした様式主義建

築となる。ただし、かつて（第二次世界大戦の終戦から一九八〇年代頃まで）は「近代建築」が現在で言う「モダニズム建築」に近い意味で流通していた。「近代建築」の意味が、対照的と言えるものに転じた過程については、以前に考察した。[2]

3　大阪のプレモダン

ここから大阪の建築の流れを、基本的に現存するものを通して略述したい。

明治維新後、造幣局が大阪に設置されて一八七一年に貨幣の鋳造を開始したが、旧桜宮公会堂は石造の工場の玄関部分を昭和初期に移築保存したもの、泉布観は工場に併設された煉瓦造の応接所である。設計者はアイルランド出身の技師であるトーマス・ウォートルスで、彼は完成後に東京に移り、近代の銀座の発展の下地となった銀座煉瓦街を手がけた。土木技師による西洋建築が、日本が開国した後、本格的な建築家が登場する以前の時期に重要な存在だったことを伝える遺産だ。

大阪では特に近代工業の勃興が、従来と異なる種類の建築物を建てさせる役割を果たした。いずれも現存はしないが、大阪紡績株式会社工場（一八八三年）、天満紡績工場（一八八八年）などが知られる。後者は辰野金吾が設計した。辰野は本格的な建築を日本に根付かせるためにイギリスから雇われて一八七七年に来日したジョサイア・コンドルの最初の教え子の一人に当たる。

続く明治中期から後期にかけての動向は、大阪の場合、公共的な建築による中之島の都市再編に代表させることが適当だろう。日本銀行大阪支店（一九〇三年）は東京の本店に次いで辰野金吾が設計し、東京帝国大学の教え子である片岡安が現場監督を担当した。これを機に辰野は東京だけでなく、大阪にも辰野片岡事務所を開設。関西の建築界の発展にも関わる。大阪府立中之島図書館（一九〇四年・二二年）の最初にできた中央部は辰野の教え子の野口孫市の手により、古典主義様式の高い理解を示す。図書館は住友家の寄付で今見る豪華なものとなった。隣の大阪市中央公会堂も民間の事業家である岩本栄之助の寄付で建設され、辰野がコーディネーターを務めたコンペで岡田信一郎が選ばれ、その案に基づいて実現した。

一九二三年に発生した関東大震災の被害の甚大さは、大阪にとっても耐震・耐火の建築の必要性を強く認識させた。明治末に日本に導入された鉄筋コンクリート造が、数は少ないとはいえ、民間で実現し始めるのはこの時期である。芝川ビル（一九二七年）をはじめ、特に大阪・船場にはこの時期の民間建築が、現在の日本の大都市の中では相対的に多く現存しており、大阪の特徴の一つとなっている。中でも渡辺節の綿業会館（一九三一年）は部屋ごとに様式を使い分け、吹き抜けの空間でそれらを統合した民間建築の最高峰というべき存在である。

三井住友銀行大阪本店（一九二六年・三〇年）や日本生命保険相互会社本館（一九三八年・六二年）は古典的なオーダーの使用を一部に留めるなど、過去の様式を前面に押し出してはいないが、全体の骨格は様式主義建築に基づいており、戦争に突入する以前における社会的な連想の強固さをかえって物語る。

4　大阪のモダン

第二次世界大戦後、戦後復興が本格化する中で新たなオフィスビルが

現れた時、それは戦前のような様式主義建築とは異なる形をしていた。新住友ビルディング（一九六二年）は、前節で扱った三井住友銀行大阪本店に隣接する。壁面の処理などに隣の建築への気遣いが現れている。しかし、違いは明確である。窓と呼ぶよりも開口部という名が適切なガラスの開口部をはじめ、機能性の表現が企業にとっても適切なものとなった時代性が現れている。

集合住宅は、モダニズム建築の大きなテーマである。日本における取り組みは戦後に本格化した。西長堀アパート（一九五八年）は、すでに取り壊された東京の晴海高層アパートと並び、住宅公団が供給した最初の高層住宅である。後に一般的となる高層団地やマンションと異なる外観なのは、共用廊下が壁で覆われていることが大きい。設計担当者が住人の受ける冬季の寒風と高所ゆえの不安を考慮したためだ。これが新たな集合住宅の実験であったことが分かる。シャープなデザインは「おうち」のような連想を廃している。

一九七〇年の大阪万博をモダン、近代化の時代の成熟期とすることに異存はないだろう。万博記念公園内にあるＥＸＰＯ'70パビリオン（旧鉄鋼館）は、テーマ館の太陽の塔と共に、同じ場所に残る数少ない出展施設である。設計したのは一九二八年から三〇年にかけてパリのル・コルビュジエのアトリエで学んだ建築家の前川國男。戦後を代表する建築家の一人となり、東京文化会館（一九六一年）や熊本県立美術館（一九七七年）など多くの作品を設計した。前川は合理精神に基づいて工業製品を用いながら、手の味わいを残した材料を好み、それによって確固とした空間を組み立てた。人間が主人公であり、世界が前進できるというモダンの理念を建築化し、自らの姿勢で体現した人物として一九八六年に没するまで日本の建築界に重きをなした。

大阪を拠点に全国的に活躍した村野藤吾は、前川とは異なる建築家である。様式主義の建築家である渡辺節の建築設計事務所に勤めてその右腕となり、前述した綿業会館を完成させた後、独立。戦前期から様式に依存しない姿勢で、時代を先駆けていた。それと共に、近代的、科学的であることを旗印にするモダニズムに全面的に乗じない精神を一九八四年に九三歳で没するまで持ち続けた。モダンでありながら、晩年まで新規な素材やデザインを持ち込んでは、新しもの好きのわれわれの心を刺激する。機能だけでなく、連想の効果も導入して商業建築を中心に活躍した。

5　大阪のポストモダン

大阪万博の翌年、中之島の近代建築の危機と保存運動が起こった。一九七一年に大阪市が中之島の市庁舎一帯を高層ビルに大改造する計画を発表。これに対して、市民や専門家団体から次々に建築と景観保存の声が挙がり、一九七四年に計画は見直された。大正時代の市庁舎は建て替えられ、大阪府立中之島図書館と大阪市中央公会堂は保存された。日本銀行大阪支店は御堂筋側を中心とした半分強の外壁を維持し、一九八二年に現在の姿となった。これらは機能の向上を錦の御旗とした開発から、これまで受け継がれてきた人工環境の保全への意識の転換を象徴している。

建築家に関して言えば、安藤忠雄の登場は、機能主義的なモダニズムではなく、次の時代への移行を示している。一九七六年に大阪に完成した住吉の長屋（一九七六年）は間口の狭い土地に建つ鉄筋コンクリート打ち放し二階建の住宅であり、中庭の左右に居室が配されている。美し

い構成であり、気候や日照を反映する豊富な経験が得られる装置でもある。冷たい素材と構成の中に、熱い空間のドラマを折り込める才能によって以後、大阪から世界へと羽ばたいていく。

第二次世界大戦後の日本の建築界においては、集合住宅への取り組み以上に、政策的に推進された持家政策も後押しして、戸建て住宅を通じて建築家の個性を表明することが建築家としての一般的なデビューの回路となった。安藤忠雄もその一人だが、これとは違った動きも一九七〇年代には現れる。「都住創」のコーポラティブハウスに対する取り組みがそれである。生き生きとした暮らしの場としての都市というイメージが最も薄まった一九七〇〜八〇年代に、「都住創」は敢然と「都市に住もう」と主張した。名称は「都市住宅を自分達の手で創る会」の略。「自分達の手で」、すなわち複数の人間が集まり、それぞれの自分らしさを実現させる共同住宅をつくるところに大きな特徴がある。具体的には、通常の集合住宅のように設計ができあがってから分譲するのではなく、そこに住みたいと思う人間が共同で土地を購入。資金分担に応じて、それぞれが何階のどこにどのような住まいを作るかを話し合いながら決め、完成後の建物の維持管理も自分たちで行う。コーポラティブ方式と呼ばれる手法である。マクロで機能的なものとは異なる都市の把握が見て取れる。

6　近年の動向

以上に概説したように、大阪には「プレモダン」、「モダン」、「ポストモダン」の変化を詳らかにできるだけの良質な建築が残存している。[3] これらを、機能面だけではなく個人的な連想の効果も含めて、生かそうというムーブメントが起きている。これもまた建築に対する最新の姿勢と考えられるため、最後に紹介したい。

二〇一四年から毎年秋の二日間、「生きた建築ミュージアム フェスティバル大阪」（略称：イケフェス大阪）という建築公開イベントが実施されている。五回目となる二〇一八年には一一三件が公開されて、のべ四万三千人が参加した。これだけ多くの市民が建築を通して交流することは国内で他になく、二〇一七年の日本建築学会賞（業績）を受賞している。[4]

イケフェス大阪の母体は、大阪市の都市整備局の中から始まった「生きた建築ミュージアム事業」である。ここには建築に関する大阪の幅広いメンバーが一堂に会している。従来の建築史や都市史の枠に留まらず、都市のハードとソフトを同時に語りながら現実の政策も影響を与えている橋爪紳也（大阪府立大学21世紀科学研究機構教授）を座長に、民間における経験も踏まえながら都市デザインの歴史把握と実践を往還する嘉名光市（大阪市立大学大学院工学研究科准教授）、商業空間の可能性を拡げるかたちでまちづくりの民間プレーヤーとして活躍する澤田充（株式会社ケイオス代表取締役）、大阪府知事時代の橋下徹市長の肝煎りプロジェクトである「御堂筋イルミネーション」などを実現させたライティングデザイナーの長町志穂（株式会社ＬＥＭ空間工房代表取締役）、近代建築を大事にしながら大阪の商を盛り立てている吉田豊（大阪商工会議所地域振興部長）、公的な実践をシンプルで伝わる表現に落とし込むデザイナーの後藤哲也（株式会社オー・プロジェクツ代表取締役）、前述の髙岡伸一（大阪市立大学都市研究プラザ特任講師）、それに私というメンバーだ。

「生きた建築ミュージアム・大阪セレクション」は大阪市都市魅力創

造戦略の重点エリアのひとつである御堂筋エリアにおける重点プログラムに位置づけられて始まった。具体的には、二〇一三年度と二〇一四年度は同エリア近隣に数多く存在する優れた近現代の建造物のなかから、特に大阪の歴史・文化、市民の暮らしぶりといった都市の営みを物語り、時代の変化と発展を反映しながら生き生きと使われている建造物を選定・顕彰し、二〇一四年度からは諸外国で行なわれているオープンハウス（建造物等の一般公開）を中心としたイベントを大阪で実現させ、継続可能な民間の枠組みを構築している。

二〇一三年度は一九一〇～七〇年代に竣工した二八件を選び、二〇一四年度に二二件を選定して計五十件とした。選定の特徴としては、以下の諸点が挙げられる。

（一）戦後の建造物も対象としたこと（船場センタービル、スリープカプセル、梅田スカイビルほか）

（二）様式主義的でないオフィスビルや商業ビルといった大衆性のなかの美にも着目したこと（御堂筋ダイビル、食道園宗右衛門町本店ビル、味園ユニバースほか）

（三）純粋な建物ではない構造物やインテリアも対象に含めたこと（梅田給気塔、純喫茶アメリカン、リーチバーほか）

（四）竣工後の優れた転用や増築にも価値を認めたこと（ルポンドシエルビル、大阪ガスビル、長瀬産業株式会社大阪本社ビルほか）

（五）部分保存も視野に入れたこと（ダイビル本館、大阪証券取引所ビル、グランサンクタス淀屋橋ほか）

こうした特徴は「生きた建築」という、おぼろげながら、新たに立ち上げた概念に包含される。私たちは「生きた建築」という概念によって、生きた過去の営みを伝えること（生業との関連）、生きて形や使い方を変えていること（増築や転用）、生き生きと使われていること（現在の利用法）といった評価軸を導入した。これが過去からの蓄積と転用によって形成されている現在の地域性を認識させ、市民の建築意識・都市意識がより高まることを期待している。

もちろん、学術的には保存とは言えないダイビル本館の選定など、議論の分かれる部分もあるだろう。しかし、個人的にも、選定には異議はない。大阪という地域の時代性を一つひとつが違ったかたちで反映しており、それぞれに選ばれるべき理由がある。選定はゴールではなく、通過点だということも注意しなくてはいけない。この事業を通じて、所有者と建築関係者と公務員、それに市民がもっと相互に顔の見える関係になることが重要だろう。イケフェス大阪を通じて、多くの建築を今までにないかたちで市民に開いていくことは「近代建築」と現在の関係をより生きたものに変えると考えられる。

注

（1）アルド・ロッシ著、大島哲蔵・福田晴虔訳『都市の建築』（大龍堂書店、一九九一年）

（2）倉方俊輔「『日本近代建築』の生成――『現代建築』から『日本の近代建築』まで」（『10＋1』二〇号「特集＝言説としての日本近代建築」、LIXIL出版、二〇〇〇年）

（3）髙岡伸一・倉方俊輔・嘉名光市『生きた建築 大阪』（140B、二〇一五年）、髙岡伸一・倉方俊輔『生きた建築 大阪2』（140B、

二〇一八年）

（4）髙岡伸一・嘉名光市・倉方俊輔・佐久間康富「大阪市『生きた建築ミュージアム事業』の取り組みについての報告」（『日本建築学会技術報告集』、二二号五一巻、七四九 - 七五四頁、二〇一六年）

（くらかた　しゅんすけ・大阪市立大学教授）

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

戦後西ドイツにおけるエルンスト・マイの住宅建設

芦部　彰

1　はじめに

二〇世紀のドイツ都市史において、モダニズム建築は一九二〇年代以降の住宅建設に大きな影響を与えた。さらに、その担い手はナチ体制の成立を機に世界各地に移動し、国際的な広がりのなかで活動することになった。他方で近年、一九四五年を「零時」とする見方を相対化したうえで、ドイツ社会の連続と変化が検討されているが、都市や住宅という建築物のあり方は、そうした考察の具体的な手がかりとなる意味がある。本稿は、モダニズム建築の国際性という問題、そして、一九四五年を「零時」とする見方を相対化したうえでの連続と断絶という問題、この二つを、ドイツの代表的なモダニズム建築家のひとりであるエルンスト・マイの戦後西ドイツでの住宅建設を通して考察する。

もっとも、モダニズム建築家としてのマイは、戦後西ドイツでの活動よりも、戦間期のフランクフルトでの活動がよく知られている。[1] このマイによって進められた都市建設は「新しいフランクフルト」として知られ、マルティン・ヴァグナーとブルーノ・タウトが活躍したベルリンと並ぶ「新しい建築」の実践の場として、日本のドイツ史研究、都市史研究の注目を集めてきた。[2] まず、フランクフルト時代の前後を含めたマイの経歴を簡単に振り返っておこう。エルンスト・マイは、一八八六年フランクフルトで生まれ、ダルムシュタット工科大学とミュンヘン工科大学で建築を学んだ。この間、一九〇八年と一〇年の二度イギリスに留学し、特に二回目の留学の際には、田園都市構想の実践者である建築家レイモンド・アンウィンの下で研修を行った。[3] 建築家としての本格的な活動を始めたのは、第一次世界大戦に従軍した後、大戦終了後の一九年、ブレスラウの公益的住宅建設組織においてであった。この組織は農村から都市への人口移動に対抗する国内植民運動や郷土保護運動にそのルーツをもち、マイは、切妻屋根の伝統的な様式を用いた住宅を設計していた。[4] その後二五年にフランクフルト市の建設参事官となり、大規模な都市計画と住宅建設を主導することになる。このフランクフルト時代に、建築様式の面でもモダニズム建築へと転じ、平屋根を用いた住宅や列状建築（Zeilenbau）からなる住宅団地を建設するとともに、住宅の標準化・規格化を推進した。[5]

図１　ブレスラウ時代、
伝統的な切妻屋根の連続住宅
（出典：　Beate Störtkuhl, „Ernst May und die Schlesische Heimstätte“, in: Claudia Quiring, u.a. (Hrsg.), *Ernst May: 1886-1970*, München 2011, S. 42）

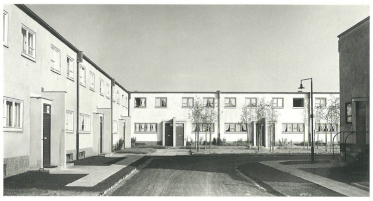

図２「新しいフランクフルト」、
平屋根のブラウンハイム団地
（出典：　Christoph Mohr, „Das Neue Frankfurt“, in: Claudia Quiring, u.a. (Hrsg.), *Ernst May: 1886-1970*, München 2011, S. 56）

フランクフルトでの活動は、世界恐慌の影響がドイツにも及び建築活動が困難になったため約五年で終焉を迎える。しかし、マイの建築家と

しての活動は、この後も一九七〇年に没するまで続いた。三〇年にはソ連の招聘に応え、五ヵ年計画のもと急速に工業化が進む同地で、新たに登場した工業都市の計画、工業労働者用の住宅団地の設計に関わった[6]。三三年にドイツでナチ政権が成立すると、母方がユダヤ系であったマイにドイツに戻るという考えはなく、翌三四年、イギリス領東アフリカへ亡命する。三七年にはナイロビに建築事務所を構え、現在のケニアやウガンダで、都市拡張計画や植民地支配層向けの邸宅や別荘、現地アフリカ人向け住宅の建設を行った[7]。さらに、第二次世界大戦が終わるとマイは再びドイツへ戻ることになる。本稿はこの戦後西ドイツでの活動に注目するが、戦後といっても、マイがドイツに戻ったのは終戦から九年近くが経過した五四年のことであった。ハンブルクに本拠を構える、ドイツ労働総同盟傘下の住宅建設コンツェルン「ノイエ・ハイマート」の設計主任として西ドイツに戻り、同社の相談役、フリーの建築家と立場を変えながら、都市計画と住宅団地建設の多くのプロジェクトに参加することになる[8]。

以上のマイの経歴から、他のモダニズム建築家と比べ二つの特徴を指摘することができる。第一に、世界恐慌後、同時代のモダニズム建築家の多くがソ連での活動を試み、さらにナチ政権が成立すると、新たな活動の場を求め亡命した。その主要な目的地としては、グロピウスやヴァグナーのようにアメリカを挙げることができる。これに対してマイは、イギリス領東アフリカへ向かい、そこで建築活動を行った。第二に、第二次世界大戦後にドイツへ戻ってきたことを指摘することができる。アメリカに亡命した建築家の場合、個別のプロジェクトで西ドイツを訪れることがあっても、本拠地はアメリカに置かれた。これに対しマイは西ドイツへ本拠を据え、建築家としての活動を続けていくことになる。こうした独特のキャリアをつんだマイの西ドイツでの建築に注目することで、冒頭で挙げた二つの問題に対し、どのような論点を提示できるだろうか。

2　東アフリカでのマイ

戦後西ドイツでの活動に立ち入る前に、東アフリカでのマイの活動を検討しておきたい。というのも、一九三四年から五四年まで二〇年に及んだアフリカ時代は、第二次世界大戦をはさみ、建築家としてのマイが、その経歴の中で最も長い時間を過ごした時期だからである。

東アフリカ時代に目を向けるにあたり、まず浮上するのが、なぜ東アフリカへ向かったのかという疑問である。アメリカとの関わりという点では、一九二〇年代からアメリカの建築家や都市計画家、なかでもルイス・マンフォードと深く交流しており、後述するように、この交流は東アフリカ時代、さらに西ドイツ時代にまで続くことになる。その一方で、マイはアメリカを徹底的な商業主義、資本主義のエートスが浸透し文明に圧倒されてしまった社会と捉えていた[9]。この裏返しとして、アフリカに対しては、文学や映画を通じて、西洋の文明や工業社会から隔絶された大地が果てしなく広がるという「ロマンチック」なイメージを抱いていた[10]。安全な亡命先を探していたマイにとって、イギリス領東アフリカへの入国に制約を受けなかったという実際的な理由はもちろん大きなものであったと思われるが、それに加えて、アメリカと対照的な、西洋の視点からは「文明」が欠けたアフリカにおいて、建築を通じて新しい社会と文化を築くというコロニアルな野心も、東アフリカという選択と無関係ではなかった[11]。

東アフリカでの建築を見ると、イギリス人植民地支配層向けの邸宅や別荘では、顧客の好みに合わせ、モダニズム建築とは趣を異にする自然石を用いたコッテージ風の設計を行う一方、都市計画や住宅団地建設ではモダニズムの貫徹を試みた。もっとも、普遍主義を掲げるモダニズム建築といっても、ヨーロッパと異なる気候への適応が不可欠であり、ピロティ、アーケード式回廊に加え、日影をつくる張り出しや格子が用いられ、換気や通風に工夫がこらされた。[12]

図３　日陰をつくる張り出し
（出典：　Justus Buekschmitt, *Ernst May*, Stuttgart 1963, S. 106）

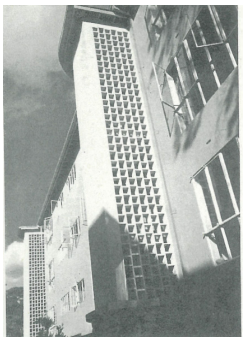

図４　格子の利用
（出典：　Regina Göckende, *Spätkoloniale Moderne*, Basel 2016, S. 227）

こうした東アフリカの地域的特性を考慮する中で、一九四五年には、木製の骨組みと粘土の壁からなる現地東アフリカ人の小屋に範をとり実験住宅を開発した。[13] この住宅は、現地の小屋と同様のアーチを再現するように規格化されたコンクリートの部材を事前に生産し、それらを組み立てる方式で建設されるもので、いわば、コンクリートのプレハブ工法で、現地の小屋を大量生産可能にしたものであった。マイはこの実験住宅に、アフリカ的要素とモダニズム建築を総合したものという位置付けを与え、マンフォード宛ての書簡では「これまでアフリカ人向けの設計は全てヨーロッパの小住宅のコピーであった。進歩的な現地人の心理に合致する住宅タイプを開発する努力は全くなされてこなかった。私は、建材を事前に生産する方法を使って、構造の外観については曲線を描く形を忠実に再現するデザインを発見したと思う」[14]と述べている。こうしたモダニズムによる「進化」と「改善」を示すことで、「進歩的な現地人」に担われるモダニズム建築のアフリカ的様式の発展を促すことが、マイの狙いであった。[15] もっとも、現地アフリカの人々はむしろ西洋人と同じ住宅に住むことを望み、実験住宅はマイの狙った反響を得ることなく終わる。[16]

図５　現地東アフリカの小屋
（出典：　Eckhard Herrel, *Ernst May. Architekt und Stadtplaner in Afrika 1934-1953*, Tübingen 2001, S. 67）

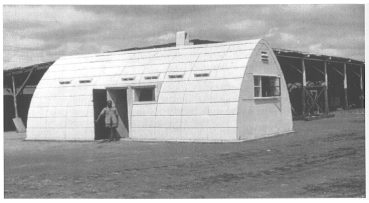

図６　実験住宅「Hook-on Slab」
（出典：　Kai K. Gutschow, „Das Neue Afrika: Ernst May's Kampala Plan as Cultural Programme“, in: Fassil Demissie (ed.), *Colonial Architecture and Urbanism in Africa*, New York 2012, p. 404）

こうした東アフリカでの建築は一九三七年にナイロビに建築事務所を構えた後、本格的に展開されたものであったが、ヨーロッパを離れたとはいえ、その後に勃発した第二次世界大戦の影響を完全に免れることはできなかった。一九四〇年四月から四二年八月にかけて、「敵性外国人」

として数回収監され、この間には建築活動の中断を余儀なくされた。しかし、この中断期間に、マイは、マンフォードとの文通やその著作を通じて同時代の理論を学び、イギリス政府の意向が大きいものの、イギリス領のどこか、あるいはナチ体制崩壊後のドイツで建築プロジェクトに関与することを期待し、来るべき「戦後」の準備を行っていた。[17]

実際に、一九四四年、北アフリカでの連合国とドイツの戦闘が終結すると設計の依頼を相次いで受け、「戦後」の建築活動は、商工業施設、ホテル、邸宅、学校・病院・博物館などの公共施設、現地アフリカ人労働者向けの住宅など、幅広いものになる。[18] この中で、ヨーロッパでの終戦前の四五年一月には、東アフリカ時代最大のプロジェクトとなる現ウガンダのカンパラ拡張計画に、五三年には、現ケニア、モンバサのポート・チューダーで、現地アフリカ人向け住宅団地の設計に着手する。[19] 両者の詳細は、西ドイツ時代の団地と合わせてとりあげ、マイの建築の連続性を検討したい。

3　ドイツへの帰国

既に述べたように、マイのドイツへの帰国が実現したのは一九五四年のことであったが、戦争が終結すると早くに帰国の決断を下し、ドイツでのキャリアを模索していた。この動きの背景には、戦後の状況を、一回限りの歴史的なチャンス、即ち、二〇年代の建築家が既存都市の制限を受けたのに対し、戦争による破壊を全く新しく都市を計画・建設できる好機と捉える認識があった。五〇年には西ドイツを講演旅行で訪れる機会を得て、東アフリカでの活動を紹介しつつ、建築家として活動するための仕事場について交渉を行った。フランクフルトの「復興担当副市長」、ライン・ルール入植会社などが候補に挙がったもののどれも実現しなかった。マイ自身、ドイツでの彼のキャリアはすでに終わったのではないかと考え始め、さらに西ドイツの「復興」が始まり、都市のあり方を一新するというよりも、戦災で傷ついた都市の「復元」「再建」的な「復興」へと向かうなかで、時期を逸したという印象を抱くようになる。[20] こうした中で、上述した東アフリカでの大規模プロジェクトが継続されていった。

帰国の実現に大きな役割を果たしたのは、ドイツに留まっていたかつてマイの下で働いたスタッフであった。彼らの尽力により一九五一年にはハノーファー工科大学から名誉博士号が授与され、さらにハンブルク市の建設局長としてマイを招聘することも決まりかけた。もっとも、その決定の数日前にナイロビの建築事務所の契約を更新していたため、この招聘は実現しなかった。しかし、ハンブルクと接点ができたことが最終的には帰国の実現に大きな意味をもち、同市に本拠を置く「ノイエ・ハイマート」社の設計主任として招聘を受け、五四年一月、ドイツへの帰国を果たした。[21]

この「ノイエ・ハイマート」社は、一九二六年にハンブルクの労働組合によって設立された公益的住宅建設会社にルーツをもつ組織である。その後、ナチ体制下でドイツ労働戦線に吸収され、「ノイエ・ハイマート・ハンブルク」と改称された。戦後になると、イギリス占領当局からドイツ労働総同盟（ＤＧＢ）に譲渡され、発足当初と同様の労働組合に支えられた公益的住宅建設会社となるが、「ノイエ・ハイマート」の名称を使用し続けた。同社は、五〇年に執行役員となったハインリッヒ・プレットの下、各地の労働組合所有の公益的住宅建設会社を子会社とし、五四年頃には、ＤＧＢ所属の労働組合が所有する全住宅建設会社

を傘下に収めた一大コンツェルンへと成長していた。[22] これにともない、従来の技術部門を拡大して、全体の設計を統括する新しい部署が設置され、そのトップとしてマイが招聘されたのである。もっともプレット以外の役員との確執や、組織が急成長する中での子会社との調整の混乱などから、マイは設計主任の地位を二年で辞職する。しかし、その後も、フリーランスの建築家として活動しつつ、ノイエ・ハイマート社から報酬をえて相談役を務め、さらに建築プロジェクトも多くは同社からもたらされるなど、その関係は継続していくことになる。[23]

4　戦後西ドイツの都市計画モデル

ノイエ・ハイマートでの最初期のプロジェクトとして、一九五四年、マイはハンブルク都心のアルトナ地区再開発計画を手がけた。ここでは、破壊を免れた住宅を取り壊し新築の列状建築と高層建築に置き換える、目の積んだ街区網を通過道路と交通量が緩和された地区に整理する、地域全体に公共の緑地を計画的に配置するといった、戦後復興を歴史的チャンスと捉えていたように、既存の構造を一新する計画を提案した。しかし、土地の再配置に必要な法的基盤が不十分で、この計画は実際にはごく一部しか実行されなかった。[24] この後も、マインツ、ブレーマーハーフェン、ヴィースバーデンの都市計画に携わるが、ここでも構想は部分的に実現されるにとどまった。[25] こうした背景として、占領期には各州によって復興法が制定され、西ドイツ建国後には五〇年の第一次住宅建設法が土地法や建築法に関する規定を先送りしたため、長く包括的な法規定が不在のままであったことを指摘できる。五二年の建築用地調達法で土地の収用などに関する規定は定められたが、州と連邦の権限をめぐる対立の結果、土地法と建築法の総合的な法規定は、六〇年の連邦建築法の制定を待たねばならなかった。[26]

戦後西ドイツにおけるマイの活動で、都市計画と並んで重要な意味をもったのが、都市郊外での住宅団地建設であった。こうしたプロジェクトをマイはどのような構想のもとで進めたのであろうか。同時代の西ドイツでは、マイの帰国前に『有機的な都市建築術』[27]、帰国後には『分節化された開放的な都市』[28]といった著作が発表され、都市空間の分散と人口密度の軽減、そして緑化による「都市農村世界 Stadtlandschaft」の実現が同時代の都市計画のモデルとなっていた。[29]

やや結論を先取りして述べると、帰国後のマイは、二〇年間を東アフリカで過ごしたにもかかわらず、特に困難をかかえることなく、これら同時代のモデルに適応してプロジェクトを進めていくことになる。その際に、彼の構想の中心となったのが、「衛星都市」と「近隣住区」の二つであった。

前者の「衛星都市」は、戦間期のフランクフルトで自ら実行した都市計画構想である。冒頭で概観したように、マイは「新しいフランクフルト」の建設に際し、モダニズム建築を実践した。建物の外観はタウトの建築にもみられる平屋根が支配的となり、住宅の間取りも機能主義的な観点から設計された。居間から独立した台所「フランクフルター・キュッヘ」の開発はその象徴的な事例ということができる。[30] 機能主義的な設計にもとづく住宅の規格化・標準化とともに、事前に建設部材を大量生産し、現場で組み立てて住宅の建設を行うプレハブ工法も推進された。これらの規格化や合理化は西ドイツでも継続され、「フランクフルター・キュッヘ」も、その発展ヴァージョンとして「ノイエ・ハイマート式キュッヘ」が開発された。[31]

図7　フランクフルター・キュッヘ
（出典：Dietmar Reinborn, *Städtebau im 19. und 20. Jahrhundert*, Stuttgart 1996, S. 111）

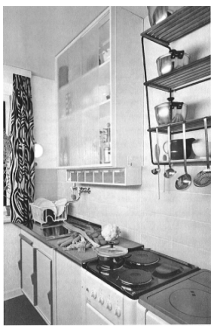

図8　ノイエ・ハイマート式キュッヘ
（出典：Florian Seidl, „„ … aus einer Situation das Bestmögliche zu machen“ : Ernst Mays Architektur und Städtebau nach 1954“, in: Claudia Quiring, u.a. (Hrsg.), *Ernst May: 1886-1970*, München 2011, S. 217）

フランクフルトでのモダニズム建築を用いた都市計画は、都市の過密状態の解消を目指したものであり、その点で、一九世紀末に現れた賃貸兵舎が建ち並ぶ大都市を改善しようとした第二帝政期の改革運動とも重なるということができる。しかし、ここでのマイの取り組みの特徴は郊外の利用にあった。即ち、都市郊外に新たな住宅地を建設することで、都心から人口の分散を図り都市問題の解決を目指したのである。

この構想をマイは「衛星都市」と呼び、フランクフルトの建設参事官となる以前、本格的に建築家としての活動を開始したブレスラウ時代、一九二一年の都市計画コンペを契機に、その概要を発表していた。従来の都市のありかたを集中型の都市拡張と位置付けたうえで、放射状の都市拡大による改善が現在試みられているが、あくまで妥協案であり根本的解決にはなっていないとし、分散型の都市計画を提案した[32]。その内容は、既存の大都市を中核都市として二〇から三〇キロメートルはなれた位置に人口五万から一〇万人の衛星都市を建設する、衛星都市は地域的な自治や雇用の機会、日常生活に必要なものの供給など自立的な都市機能をもつ、他方、中核都市には地方行政の中央機関や経済団体支部、銀行、大学、美術館が残され、両者が交通網で結ばれることで有機的な衛星都市圏を形成するというものであった[33]。

この構想は、既存都市から離れた緑地のなかで職住近接の自立的なコミュニティ形成を試みるイギリス田園都市運動の影響を強く受けたものである。マイは、一九一〇年から二年間、田園都市運動の創始者ハワードの構想のもと最初の田園都市レッチワースを設計したイギリスの建築家レイモンド・アンウィンの設計事務所で働く機会を得て、この期間に田園都市ハムステッドの建設にも参加していた[34]。もっとも、実際のフランクフルトでは、都心から数キロメートルの位置に住宅団地が建設され、衛星都市といえるほどの自立性は実現できなかったという限界もあった[35]。

都市の過密問題の解決を郊外に求める発想は、田園都市運動に代表されるように世紀転換期に登場し、ドイツでは、タウトやマイのモダニズム建築による郊外住宅団地建設のような実験的試みが戦間期に展開された。第二次世界大戦後には、ヨーロッパ各国で大規模な郊外利用が行われ、イギリスでは田園都市の系譜の下にあるニュータウンの建設が本格化し、西ドイツでは「分節化された開放的な都市」や「都市農村世界」という理念の下、郊外での住宅団地建設が進められることになる[36]。こうした戦後の動きは、戦間期のマイの試みと連続的なものであり、「衛星都市」はマイにとって指導理念であり続けた。

もっとも西ドイツでは、こうした都市計画の理念にしたがったもののほかに、キリスト教民主同盟が推進した一九五六年の第二次住宅建設法による、「戸建て持ち家住宅」の建設という文脈でも郊外が住宅建設の場となった[37]。この動きに対しマイは、個人所有の住戸が建ち並ぶことで統一的な計画が困難になることを危惧し、「共同設備をそなえ大規模か

つ統一的に計画された住宅団地という、新しい社会構造を創出するための都市計画上の成果が脅かされることがあってはならない」と批判している。[38] マイの住宅団地建設は、郊外を舞台とした、異なる理念に基づく住宅建設の対抗関係の中で進められたものであった。[39]

もうひとつのモデル、「近隣住区」もまた田園都市運動の延長上に位置する構想であり、一九二九年、アメリカの都市計画家クラレンス・ペリーによって新しいコミュニティ計画として提唱された。[40] その内容は、小学校の校区を念頭に人口は五〇〇〇人程度とする、境界を幹線道路などで明示する、住区内に公共施設や店舗を設け徒歩圏内で日常生活を可能にする、住区内に小公園や緑地などレクリエーションの場を設ける、といった原則をもつ。都市生活を人間的スケールに戻し、草の根の民主主義を支えるコミュニティ意識を育むことを目指したものであったが、アメリカからヨーロッパ各国に伝わり、それぞれの地域、時代によって独自の発展をとげることになる。[41] ナチ体制下のドイツでは、四〇年のハンブルクの都市計画で、階層的なナチ党組織の中に「住宅団地細胞としての地域グループ Ortsgruppe als Siedlungszelle」と位置付けられ、「民族共同体」を支える単位として利用された。[42]

「近隣住区」はマイがヨーロッパを去った後に大きく発展をとげたアイデアだが、[43] こうした理論の発展を、アメリカの理論家マンフォード、さらに、アメリカに亡命していたグロピウスやヴァグナーとの交流を通じてフォローしていた。[44] 実際に、グロピウスとヴァグナーは大戦中の一九四一年から四二年にかけ、アメリカで「近隣住区」の原則に従った人口五〇〇〇人の町の建設を実践しており、[45] マイもまた、東アフリカでの最大のプロジェクトとなるカンパラ拡張計画とモンバサのポート・チューダー団地で「近隣住区」を試みることになる。

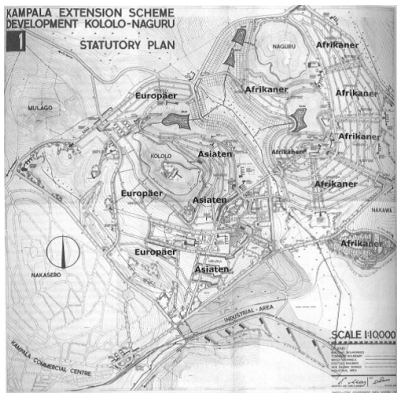

図９　カンパラ拡張計画、人種別の住宅地開発

（出典：　Regina Göckende, *Spätkoloniale Moderne*, Basel 2016, S. 200）

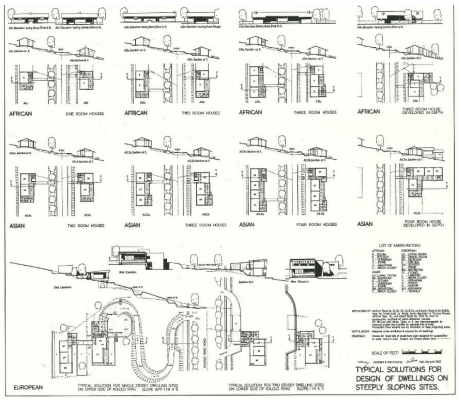

図１０　人種別の住宅の規格化

（出典：　Kai K. Gutschow, „Das „Neue Afrika"", in: Claudia Quiring, u.a. (Hrsg.), *Ernst May: 1886-1970*, München 2011, S. 207）

カンパラ拡張計画は、既存都市東部の丘陵地帯に都市を拡大するもので、地形に合わせ九つの住宅地が計画された。[46] 最も東の三つに注目すると、コロ丘陵にはヨーロッパ人と、インド人を中心とするアジア人、ナグル丘陵にはアフリカ人、丘陵の南東に位置するナカワ工業地区近くには出稼ぎアフリカ人労働者と、人種別に住宅地が建設され、また人種別に住宅タイプの規格化が行われた。[47] その中で、ナグル丘陵では、約一〇〇家族を一つの「家族グループ」としてまとめ、四つの「家族グループ」で三〇〇〇人ほどの「近隣住区」を構成し、「住区」に小学校、病院を設ける計画が立案された。[48]

より詳細な建築の様子がわかっているのがモンバサのポート・チューダー団地である。団地全体で五〇〇〇人の「近隣住区」を形成し、それがさらに、より小さなグループに分節化される。[49]「図11」と「図12」を見ると、団地の敷地は長方形で、縦方向に緑地が貫き、緑地の両側に、三階建て列状建築の住棟（aとb）二棟と二階建ての連続住宅（c）一棟をセットにして建物が配置され、この三棟の建物に囲まれた空間を単位とするグループが組織されていることがわかる。各グループには事務所（d）が設けられるとともに、三棟の建物に囲まれることで創出される空間は菜園（m）として利用され、この空間を共有することでグループ内の共同体を育てることが企図された。こうしたグループ毎の小コミュニティを「近隣住区」という、より大きな共同体にまとめるため、フットボール場（k）近く、敷地の中央に、団地全体のセンター（e）、保健センター（f）、保育所（g）といった公共施設が配置される。商店（j）は長方形の敷地の上部と下部の二ヶ所に、さらにペリーが「校区」をひとつの単位とした様に、小学校（h）と家政学校（i）が敷地の上部に置かれているのが見える。[50]

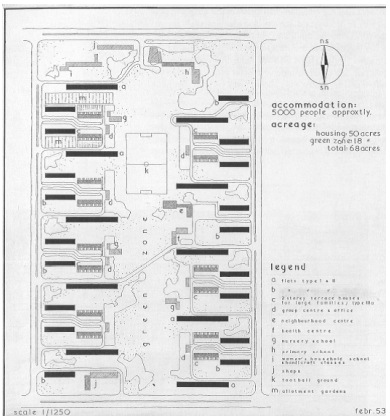

図11　ポート・チューダー団地、建物の配置図
（出典：　Eckhard Herrel, *Ernst May. Architekt und Stadtplaner in Afrika 1934-1953*, Tübingen 2001, S. 118）

図12　三棟の建物による中庭的な空間の創出
（出典：　Deutsches Architekurmuseum, http://archiv.dam-online.de/handle/11153/160-018-013）

5　一九五〇年代の住宅団地

この「近隣住区」に焦点をあてて、東アフリカ時代と五〇年代西ドイツのマイの住宅団地を比較してみたい。

まず、最初期の住宅団地、ブレーマーハーフェンのグリューンヘーフェ団地を見てみよう。[51]ここでは一九五四年から五七年にかけて、四〇ヘクタールの敷地に二〇〇〇戸の住宅が建設された。建物の配置により中庭的な空間を多数生み出す構造が特徴的で、モンバサのポート・チューダー団地との類似性を指摘できる。ただし、長方形の枠組みはくずされ、敷地は扇状の形態となり、曲線をより意識しているという差異もみられる。この団地でも、列状建築の住棟が作り出す中庭を囲む約二〇〇戸が「家族グループ」と名付けられて、団地の社会構造の単位とされ、中庭を通じてコミュニティ意識を育むことが企図された。[52]

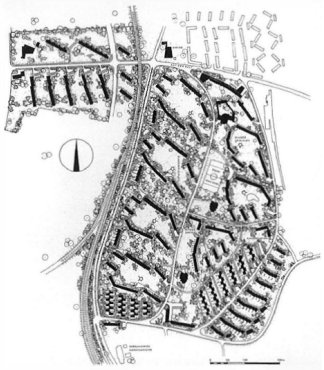

図13　グリューン・ヘーフェ団地の計画図
（出典：　Werner Durth / Jörn Düwel / Niels Gutschow, *Architektur und Stödtebau der DDR. Die frühen Jahre*, Berlin 2007, S. 504）

建物については、簡素な直方体の建物に階段室やバルコニーでアクセントをつけたものを基本としながら、異なるタイプの住宅からなる団地が

目指された。主に四階建ての建物から構成され、南部・南東部にはより低層の二階建てか平屋の連続住宅が配されている。学校、幼稚園、スポーツ広場、商店といった公共施設が計画され、十四階建ての高層建築が団地の中心を意識させる役割を担った。[53]

異なるタイプの建物を用いることで、第一に、多様な住宅の需要に応えること、第二に、家族の増減や所得の変動の際に、「近隣住区」内での転居を可能にすることが企図された。[54] また、建物の高さや長さに違いをつけ、建築物の並びをかみ合わせたり、ずらしたりすることで造形上のアクセントをつけ、カーブのついた道とともに列状建築の画一性の印象を和らげる狙いをみてとることもできる。[55]

西ドイツ時代初期の住宅団地から、「近隣住区」をより小さいグループへと分節化すること、そのグループを中庭の共有により共同体として育てること、また、そうした空間を創り出すよう建物を配置すること、これらをマイが東アフリカ時代から連続して行っていることを確認することができる。見知らぬ人の間で見知らぬ人として暮らすという都市生活の匿名性に対し、都市を感覚的に把握可能な単位に分節化することで共同体を創出し、「家族グループ」「近隣住区」「都市」という階層構造のなかで、都市を人々の社会的結合、共同性が回復された有機体とすることが目指された。[56] こうした共同体を創出する構想が、建築により実行されている様子を読み取ることができよう。

次に、少し後の時期、かつ、より大規模なブレーメンのノイエ・ファー団地を見てみよう。[57] この住宅団地は、ノイエ・ハイマートのブレーメンの子会社が施主となり、一万五〇〇〇戸の住宅という当時ヨーロッパ最大規模のプロジェクトとして、一九五六年から六一年にかけて建設された。ここでは建築家の作業共同体が計画を行い、マイは、同時代の都市モデルを発信していた建築家ライヒョウ、ブレーメンの建築家であるゾイメやハーフェマンとともにチームの一員として活動した。[58]

作業共同体のなかでのマイの担当の詳細は必ずしも明らかになっていないが、幾つかの変化を見て取ることができる。まず、住宅団地の大規模化によって、ひとつの団地がひとつの「近隣住区」を構成するのではなく、住宅団地内に複数の「近隣住区」が設けられるようになり、ノイエ・ファー団地では、五つの「近隣住区」が設定された。[59] 他方で、建物の配置により中庭的な空間を創出し、住区内の下位のグループで共同体意識を涵養する構成は続けられた。[60] もっとも、団地全体の大規模化によって、そうした小規模なグループの意義が曖昧になった印象もあり、さらに、建物は直角直行、反復がより顕著となった。[61]

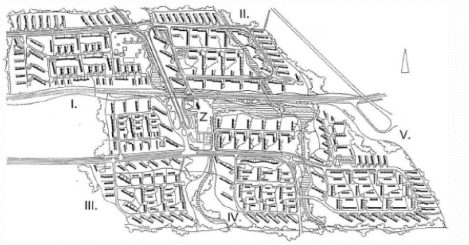

図 14　ノイエ・ファー団地と五つの近隣住区
（出典：　Ralf Lange, *Hamburg. Wiederaufbau und Neuplanung*, Königstein 1994, S. 90）

団地の中心には、商業地区とともに、フィンランドの建築家アルヴァ・アールトの設計による二十二階建ての高層アパートメントが建設された。建物がより高くなる傾向は団地全体としてみられ、四階か五階建ての住宅に十四階建て高層建築がアクセントをなしていたグリューンヘーフェに対し、五階、八階、さらに十階を超える建物が多く用いられた。その一方で、建物の高さのズレの利用は維持された。二十二階建て高層アパートには大規模な団地の中心を意識させる役割が与えられ、さ

らに団地の中心に高い建物が位置し、周縁に向かうにつれ低くなり、外縁に低層の連続住宅を置き、団地外部の緑地への移行を導く工夫がなされている。[62]

6　一九六〇年代の変化

ここまで見たように、マイは、東アフリカ時代から西ドイツ時代にまたがって、「近隣住区」を用いた住宅団地建設を試みていた。この状況が、一九六〇年代になると大きく変化することになる。すでに指摘したように、五〇年代の団地でも短期間で差異が見られたが、「近隣住区」は維持されていた。これに対し、六〇年代に生じたのはより根本的な都市計画モデルの変化であった。戦後の「分節化された開放的な都市」というモデルへの批判が高まり、都市の分節化を疑問視する流れのなかで、「近隣住区」に対しても、共同体の形成は進んでおらず、むしろ社会的な孤立を生んでいるという批判が向けられた。[63]

かわって登場したのは、戦後の都市計画、さらに言えば第二帝政期以来の住宅改革運動が一貫して追求してきた都市密度の低減とは反対の方向性をもつ、「密集による都市性 Urbanität durch Dichte」という都市像であった。[64] 都市計画のパラダイムの変化に応じて、住宅団地のあり方も大きく変化することになる。この時代の都市性として、ショッピングセンターのような消費の機会や充実したインフラが提供されていることが望まれた。[65] これらを維持するには、その採算がとれる人口が必要であり、経済性の観点から、より大きく、より高密度になった新世代の大規模住宅団地が登場することになった。[66]

この流れの中で、マイは近隣住区モデルによる住宅団地建設から離れ、同時代の潮流に従っていくことになる。マイの最後の大規模プロジェクトである一九六五年から七〇年に建設されたダルムシュタット・クラニッヒシュタイン団地を見てみよう。まず、何度も屈曲する長大な建物が目につく。高さ・長さの双方で建物の規模は拡大し、さらに、団地の中央に最も高い建物を置き、周辺に向かうにつれ低くなるという配置は消える。かわって、高く長い建物の「壁」が団地を縁取り、これらに囲まれた空間の中に一階か二階建ての建物が置かれる。この低層の建物の列と長大な建物が、極端なコントラストの印象を与える。[67] この住宅団地の姿に、五〇年代からの変化を具体的に見て取ることができよう。

図 15　ダルムシュタット・クラニッヒシュタイン団地の建築模型
（出典：　Deutsches Architekurmuseum, http://archiv.dam-online.de/handle/11153/160-039-009）

7　おわりに

ここまでのマイの建築に即した考察をもとに、モダニズム建築の国際性という問題、一九四五年を「零時」とする見方を相対化したうえでの連続と断絶という問題に対して、以下の三点を指摘することができる。

第一に、マイの建築に即して時代区分を設けるならば、東アフリカから西ドイツへと活動の場を移したものの、東アフリカ時代と五〇年代の西ドイツの住宅団地には連続性がみられ、六〇年代に大きな変化が生じ

たとまとめることができる。東アフリカから西ドイツに帰国して困難なく同時代の理論的水準で活動できたと述べたが、その具体的なありようを、「近隣住区」モデルにしたがったモンバサのポート・チューダーとブレーマーハーフェンのグリューンヘーフェが示している。

さらにこの背景を考えると、ひとつには、英語圏・イギリス領東アフリカにおいて、戦前からの人的つながりを通じ、戦中のグロピウスやヴァグナーの試みも含め、知識を更新することができたというモダニズム建築家の国際的な交流の広がりと深さを指摘できる。いまひとつには、戦後復興の理念や都市計画のアイデアの内容そのものが、マイがすでに戦間期に実践していた郊外を利用した都市密度の軽減という方向性において、戦前と連続的なものであったということを指摘できる。マイ自身は、戦後復興を全く新しく都市を建設するための一回限りの歴史的チャンスとして、一九四五年を「零時」的に捉えていたが、実際には、すでに戦前に練られた理念や構想の延長上で都市計画も住宅団地建設も行われた。

第二に、モダニズム建築をとりまく社会的文脈や、モダニズム建築のもつ社会的プロジェクトとしての性格に目を向けると、二〇年代から、モダニズム建築は歴史主義を斥けた機能主義と新技術の投入による都市改造や社会改革に絶えず関心を寄せ、都市密度の低減を実現する都市計画と郊外住宅団地の建設を実行してきた。これをマイに即して見ると、その建築は、二〇年代から五〇年代にかけて田園都市運動の延長上で登場した「衛星都市」「近隣住区」という都市計画構想の中で展開され、既存の都市で失われた共同体を、新しい建築の理念によって構築するという社会改革的関心と強く結びついていたということができる。共同体の構築とモダニズムの進歩性や革新性は、一見すると矛盾するようにも見えるが、工業化の結果としての共同体の消滅という社会問題に対し、過去への直接の回帰としてではなく、工業社会がもたらしたものをさらに発展させ、それを介して有機的な共同体に到達するという解決策が追求されたものと理解することができる。[68]

他方で、東アフリカという文脈では、カンパラ拡張計画で人種別に住宅地建設、住宅タイプの開発が行われたことが示すように、モダニズム建築の機能主義や規格化が、植民地支配のなかで人種別の隔離や管理に寄与する役割を担ったことも見過せない点である。さらに、マイの主観ではアフリカ的特性とモダニズム建築を総合したものと位置付けられた実験住宅が、現地アフリカの人びとには不評に終わったことも、モダニズム建築の普遍性の主張と、非西洋の現地社会との関係を考えるうえで興味深い事例である。

第三に、六〇年代半ばのマイの住宅団地の変化について考えると、マイの西ドイツでの活動時期が、モータリゼーションが急速に進んだ時期であったことが重要であるように思われる。自家用車の所有台数は、一九五四年の一四六万台から、一九六〇年の四四八万台へ、さらに、一九六三年の七三〇万台、一九七〇年の一三九四万台へと増加した。[69] マイの西ドイツでのキャリアの間に一〇倍になり、特に六〇年代に入ってからの絶対数の増加が顕著といえる。「近隣住区」が魅力を失い共同体形成の効果が疑問視された背景として、鉄道とその延伸を念頭に構想された田園都市の共同体イメージと、自家用車の普及によって移動の質が変化した六〇年代社会の共同体や共同性の実態との間に齟齬が生じていたのではないか、という点を問う必要があるように思われる。[70]

最後に、ここまで挙げた三つの論点をふまえ、あらためて一九六〇年代の変化の意味を確認したい。六〇年代に登場した「密集による都市

性」という方向性は、二〇年代から五〇年代にかけて郊外を利用した分散と都市密度の低下を追求してきたマイの建築の連続性に対して、根本的な断絶をもたらすものであった。このことの歴史的な位置付けに目を向けると、六〇年代の変化は、戦後期のなかでの局面の変化であるだけでなく、より長いタイムスパンでの二〇年代からの連続性の終焉、さらには、戦間期の試みの基盤を提供したという意味では世紀転換期からの連続性の終焉という局面の変化として捉えることができる。

もっとも、連続性が終焉していく一九六〇年代の変化の後に、どのような局面が新たに始まったのかという点については、六〇年代半ばに最後のプロジェクトに着手し、七〇年に没したマイは、変化の只中でキャリアを終えたという性格が強く、マイの事例だけでは見通すのが難しい側面もある。そこで、本稿の考察結果をこの後の時期を論じた先行研究に位置付けつつ、連続性の終焉後の新局面について展望してみたい。この問題を考えるうえで重要なのが、七三年のオイルショックの影響に注目する研究である。これらの研究は、六〇年代の変化を踏まえつつ、経済の拡大局面が終焉したことの意味を重視して、七〇年代初頭を新しい局面が始まる画期と位置付ける[71]。この工業的近代の終焉とともに、マイの事例で顕著であった社会的プロジェクトとしてのモダニズム建築にとって、その前提をなす社会的文脈が失われたと考えることができる。

かわって七〇年代に登場したのが、郊外から都心への関心の移動と歴史的都市の再発見の動きであった。この新しい動向で注目すべきは、工業化以前の伝統的街並みだけでなく、工業化が進展した第二帝政期の市街もまた歴史的建築として再評価の対象となったことである[72]。第二帝政期の市街は、密集し劣悪な住環境の集合住宅を指す賃貸兵舎の語に象徴されて、住宅改革や都市計画の多様な潮流の共通の「敵」として位置付けられてきたが、ここでは、密集した市街ブロックが「古き良き時代」というノスタルジーの対象として、いわばその記念碑性において新たな意味付けがなされたのである[73]。記念碑としての性質を備えていたプレモダンの建築から「記念」や「連想」の要素が背後に退き、「機能」の面が前面化したモダニズム建築の時代をへて、モダニズム建築が対峙した建物や市街に新たな「記念」の要素を見出そうとするこの動きに、「ポストモダン」への移行を見て取ることができるように思われる[74]。

さらに、タウトのベルリンの建築が示すように、戦間期のモダニズム建築もまた、建築当時とは異なった文化的な意義をもつ「記念碑」へと変化しつつある[75]。こうした近年の動きを踏まえて、本稿が対象としたマイに再び目を向けると、戦間期のフランクフルトの建築に比べ、西ドイツ時代の建築に対する評価は低いものになっている。亡命先で客死したタウトに対し、亡命先から帰国したマイは、戦後の分断国家の歴史と深く関わることになった。マイの西ドイツ時代の建築も、時間的距離とともに異なる受容をされていくのか、「戦後史」のなかでの局面の変化と西ドイツの記憶のされ方を考えるための、具体的な考察対象となりうるのではないだろうか。

注

（1）ここでエルンスト・マイに関する研究史を簡単に整理しておきたい。マイの活動を記録する文献は生前から刊行されており、六〇年代にはマイ公認の伝記が出版されている。Justus Buekschmitt, *Ernst May*, Stuttgart 1963; その後、長く研究の対象となったのがフランクフルトにおける都市計画と住宅建設であり、八〇年代にはこれらを概観する

文献が登場している。代表的なものとして、Christoph Mohr / Michael Müller, *Funktionalismus und Moderne. Das Neue Frankfurt und seine Bauten 1925-1933*, Köln 1984; Peter Lorenz, *Das neue Bauen im Wohnungs- und Siedlungsbau, dargestellt am Beispiel des neuen Frankfurt, 1925-33*, Stuttgart 1986; 他方、フランクフルト時代以降のマイを対象とする研究が本格的に登場するのは、二〇〇〇年代以降のことになる。もっとも、マイの生誕百周年にあたる一九八六年には、『バウヴェルト（Bauwelt）』誌二八号で特集号が組まれ、その中では、フランクフルト時代を超えた連続と変化の考察も試みられていた。Vgl. Dietrich Worbs, „Kontinuität und Wandel in Mays Stadtplanung", in: *Bauwelt*, 28/1986, S. 1074-1075; 近年では、こうした研究をふまえ、マイのキャリア全体を総合的に捉える試みがなされている。代表的なものとして、Claudia Quiring / Wolfgang Voigt / Peter Cachola Schmal / Eckhard Herrel (Hrsg.), *Ernst May: 1886-1970*, München 2011.

（2）代表的なものとして、後藤俊明『ドイツ住宅問題の政治社会史――ヴァイマル社会国家と中間層』未来社、一九九九年、第六章（四六一-五五五頁）；馬場哲「二十世紀初頭のドイツにおける都市計画と住宅政策――フランクフルト・アム・マインの社会的住宅建設を事例として」中野隆生（編）『20世紀の都市と住宅――ヨーロッパと日本』山川出版社、二〇一五年、四一一-四三〇頁。

（3）Eckhard Herrel, „Stete Reifung, Studienjahre, Villenbauten in Frankfurt und Kriegsgräber an der Front", in: Claudia Quiring, u.a. (Hrsg.), *Ernst May: 1886-1970*, München 2011, S. 16-21.

（4）Beate Störtkuhl, „Ernst May und die Schlesische Heimstätte", in: Claudia Quiring, u.a. (Hrsg.), *Ernst May: 1886-1970*, München 2011, S. 33-49.

（5）Christoph Mohr, „Das Neue Frankfurt. Wohnungsbau und Großstadt 1925-1930", in: Claudia Quiring, u.a. (Hrsg.), *Ernst May: 1886-1970*, München 2011, S. 51-67.

（6）この間、ソ連内部でのモダニズムからスターリン様式への移行にともなう軋轢も経験することになる。Voigt, „Stratege für die Neue Stadt", in: Claudia Quiring, u. a. (hrsg.), *Ernst May: 1886-1970*, München 2011, S. 235; ソ連時代のマイについては、Thomas Flierl (Hrsg.), *Standardstädte. Ernst May in der Sowjetunion 1930-1933*, Berlin 2012; Evgenija Konyševa / Mark Meerovi (Hrsg.), *Linkes Ufer, rechtes Ufer: Ernst May und die Planungsgeschichte von Magnitogorsk (1930-1933)*, Berlin 2014; Thomas Flierl, „Ernst May's Standardised Cities for Western Siberia", in: Harald Bodenschatz / Piero Sassi / Max Welch Guerra (eds.), *Urbanism and Dictatorship. A European Perspective*, Berlin 2015, pp. 199-216.

（7）東アフリカ時代のマイの活動に光を当てた研究として、Eckhard Herrel, *Ernst May. Architekt und Stadtplaner in Afrika 1934-1953*, Tübingen 2001; マイのキャリア全体を検討するなかで、この時期の位置付けを試みたものとして、Kai K. Gutschow, „Das „Neue Afrika"", in: Claudia Quiring, u.a. (Hrsg.), *Ernst May: 1886-1970*, München 2011, S. 196-213; また、近年では、モダニズム建築とコロニアリズムとの関係を考察する文脈でマイも検討の対象とされている。Kai K. Gutschow, „Das Neue Afrika: Ernst May's Kampala Plan as Cultural Programme", in: Fassil Demissie (ed.), *Colonial Architecture and Urbanism in Africa*, New York 2012, pp. 373-406; Regina Göckende, *Spätkoloniale Moderne*, Basel 2016, bes. S. 123-236.

（8）西ドイツでのマイについては、二〇〇八年にミュンヘン工科大学に提出されたザイデルの博士論文がこのテーマに取り組んだ最初の本

格的な研究であり、現在でも研究水準を示すものということができる。Florian Seidl, *Ernst Mays Architektur und Städtebau nach 1954*, Diss. TU München, 2008; また、註1の末尾に挙げた文献でもザイデルによって簡潔な概観がなされている。Florian Seidl, „„... aus einer Situation das Bestmögliche zu machen“: Ernst Mays Architektur und Städtebau nach 1954“, in: Claudia Quiring, u.a. (Hrsg.), *Ernst May: 1886-1970*, München 2011, S. 214-227.

(9) Gutschow, „Das „Neue Afrika““, S. 197.

(10) Gutschow, „Das Neue Afrika““, S. 385.

(11) Gutschow, „Das „Neue Afrika““, S. 197f.

(12) Vgl. Buekschmitt, *Ernst May*, S. 84-86, 101-107; Herrel, *Ernst May*, S. 88-99; Gutschow, „Das „Neue Afrika““, S. 199f.

(13) Buekschmitt, *Ernst May*, S. 99f.; Herrel, *Ernst May*, S. 67-69; Gutschow, „Das Neue Afrika“, p. 403.

(14) Göckende, *Spätkoloniale Moderne*, S. 224より引用。

(15) Gutschow, „Das „Neue Afrika““, S. 208f.

(16) Herrel, *Ernst May*, S. 68

(17) Buekschmitt, *Ernst May*, S. 86; Herrel, *Ernst May*, S. 56-61; Göckende, *Spätkoloniale Moderne*, S.147f.

(18) Gutschow, „Das „Neue Afrika““, S. 197; Göckende, *Spätkoloniale Moderne*, S. 150-160.

(19) カンパラ拡張計画については、Herrel, *Ernst May*, S. 70-74; Gutschow, „Das „Neue Afrika““, S. 201-203, 207; Gutschow, „Das Neue Afrika“, pp. 387-394; Göckende, *Spätkoloniale Moderne*, S. 196-223; ポート・チューダー団地については、Herrel, *Ernst May*, S. 116-124; Göckende, *Spätkoloniale Moderne*, S. 160-163.

(20) Seidl, *Ernst Mays Architektur und Städtebau nach 1954*, S. 26; Seidl, „ ... aus einer Situation das Bestmögliche zu machen“, S. 215.

(21) Seidl, „ ... aus einer Situation das Bestmögliche zu machen“, S. 215-217.

(22) Seidl, *Ernst Mays Architektur und Städtebau nach 1954*, S. 15. ノイエ・ハイマート社については、Peter Kramper, *Neue Heimat. Unternehmenspolitik und Unternehmensentwicklung im gewerkschaftlichen Wohnungs- und Städtebau 1950-1982*, Stuttgart 2008, bes. S. 151-183.

(23) Seidl, *Ernst Mays Architektur und Städtebau nach 1954*, S. 33ff.

(24) Ralf Lange, *Hamburg. Wiederaufbau und Neuplanung*, Königstein 1994, S. 80-82; Seidl, „ ... aus einer Situation das Bestmögliche zu machen“, S. 221f.; Voigt, „Stratege für die Neue Stadt“, S. 237f.

(25) Seidl, *Ernst Mays Architektur und Städtebau nach 1954*, S. 46-56.

(26) Seidl, *Ernst Mays Architektur und Städtebau nach 1954*, S. 13.

(27) Hans Bernhard Reichow, *Organische Stadtbaukunst*, Braunschweig 1948.

(28) Johannes Göderitz / Roland Rainer / Hubert Hoffmann, *Die gegliederte und aufgelockerte Stadt*, Tübingen 1957.

(29) ティルマン・ハーランダー（北村昌史・長尾唯・前田充洋訳）「20世紀後半ドイツ連邦共和国における住宅と都市の発展」中野隆生（編）、前掲書、二五四 - 二六〇頁；白川耕一「もっと空間を、もっと緑を」中野隆生（編）、前掲書、四四四 - 四四五頁。

(30) Voigt, „Stratege für die Neue Stadt“, S. 231f.; フランクフルター・キュッヘは、アメリカのテーラー主義の影響のもと、台所を工場ないし実験室に、調理する主婦を労働する技師に見たて、効率的な配置と作業工程を検討し、合理的な動線を実現する空間として考案された。後藤、

前掲書、五〇七 - 五〇八頁。フランクフルター・キュッヘの考案者シュッテ＝リホツキーによる回顧として、Margarete Schütte-Lihotzky, „Meine Arbeit mit Ernst May in Frankfurt a. M. und Moskau“, in: *Bauwelt*, 28/1986, S. 1051-1054.

(31) Seidl, „... aus einer Situation das Bestmögliche zu machen“, S. 217.

(32) Ernst May, „Stadterweiterung mittels Trabanten“, in: *Städtebau*, 19 (1922), S. 51-55.

(33) May, „Stadterweiterung mittels Trabanten“, S. 52-54; 後藤、前掲書、四八一 - 四八二頁。

(34) Herrel, „Stete Reifung“, S. 19; 後藤、前掲書、四八七 - 四八八頁。

(35) フランクフルト郊外に位置するニッダ河畔のレーマーシュタット団地やヴェストハウゼン団地では、雇用を生む工場誘致が実現せず、生活必需品を充足する店舗も不足した。集会所や図書館、保育所など公共施設の計画も十分に実現されなかった。この点で、職住近接の自立的な生活共同体の形成という本来の構想からは、限界の多いものであった。後藤、前掲書、四九七、五〇一頁；なお、こうした限界に対して、マイは、衛星都市構想を数十年のタイムスパンではじめて実現できるものと考えており、これらの団地を構想の第一歩として積極的に位置付けていたことも指摘されている。馬場、前掲論文、四二四 - 四二五頁。

(36) 都市と住宅に関わる研究動向を整理しつつ、世紀転換期以降の郊外利用の展開を示したものとして、北村昌史「近現代ヨーロッパにおける都市と住宅をめぐって」『西洋史学』二五三号（二〇一四年）、五〇 - 六二頁。

(37) 拙著『カトリシズムと戦後西ドイツの社会政策――1950年代におけるキリスト教民主同盟の住宅政策』山川出版社、二〇一六年。

(38) 一九五五年十一月二十二日の『ヴェルト（Die Welt）』紙での発言。拙著、一〇三頁を参照。

(39) 五〇年代から六〇年代にかけての住宅団地建設については、Ulfert Herlyn / Adelheid von Saldern / Wulf Tessin (Hrsg.), *Neubausiedlungen der 20er und 60er Jahre*, Frankfurt/M 1987; Adelheid von Saldern, *Häuserleben. Zur Geschichte städtischen Arbeiterwohnens vom Kaiserreich bis heute*, Bonn 1995; Dietmar Reinborn, Städtebau im 19. und 20. Jahrhundert, Stuttgart 1996.

(40) クラレンス・A・ペリー（倉田和四生訳）『近隣住区論』鹿島出版会、一九七五年。また、近隣住区論が提唱された経緯と背景については、同書の訳者による解説が詳しい、倉田和四生「近隣住区論の形成と発展」ペリー、前掲書、一九三 - 二一〇頁。

(41) Dirk Schubert, „Transatlantic Crossings of Planning Ideas: The Neighborhood Unit in the USA, UK, and Germany“, in: Jeffery. M. Diefendorf / Janet Ward (eds.), *Transnationalism and the German City*, New York 2014, pp. 141-158.

(42) David Kuchenbuch, *Geordnete Gemeinschaft. Architekten als Sozialingenieure – Deutschland und Schweden im 20. Jahrhundert*, Bielefeld 2010, S. 140-161.

(43) なお、マイはソ連時代に「街区（Quartal）」を単位とした都市計画を試みており、一九三〇年のマグニトゴルスク都市計画案における「街区（Quartal）」を「近隣住区」に相当するものと解釈する研究もある。ただし、正確な位置付けには、両者の異同と立案の背景や経緯について、なお検討の必要がある。Vgl. Koos Bosma, “New socialist cities: foreign architects in the USSR 1920–1940”, in: *Planning Perspectives*, 29-3 (2014), p. 319; マイの回顧として、Ernst May, „Städtebau und Wohnungswesen in der UdSSR nach 30 Jahren“, in: *Bauwelt*, 3/1960, S. 65.

(44) Seidl, *Ernst Mays Architektur und Städtebau nach 1954*, S. 14; Göckende, *Spätkoloniale Moderne*, S. 147f., 204.

(45) Vgl. Álvaro Sevilla-Buitrago, „Martin Wagner in America“, in: *Planning Perspectives*, 32-4 (2017), pp. 481-502; Martin Wagner / Walter Gropius, „Cities' Renaissance“, in: *The Kenyon Review*, 5-1 (1943), pp. 12–33.

(46) Gutschow, „Das Neue Afrika“, pp. 388f.

(47) ヨーロッパ人、アジア人、アフリカ人という人種の階層順に住宅が考案され、ヨーロッパ人の住宅が最も大きく部屋も機能分化しているのに対し、アフリカ人向け住宅は最も小さく、部屋の機能分化もなされない。Herrel, *Ernst May*, S. 73; Gutschow, „Das „Neue Afrika““, S. 207; Gutschow, „Das Neue Afrika“, pp. 401f.; Göckende, *Spätkoloniale Moderne*, S. 199-201, 216-218.

(48) Herrel, *Ernst May*, S. 73; Gutschow, „Das Neue Afrika“, pp. 373-406; Göckende, *Spätkoloniale Moderne*, S. 210f.

(49) Herrel, *Ernst May*, S. 120; Seidl, *Ernst Mays Architektur und Städtebau nach 1954*, S. 16.

(50) Herrel, *Ernst May*, S. 118, 120f.

(51) 一九五四年にノイエ・ハイマートの傘下におかれたブレーメンの公益的住宅建設会社GEWOBA（Gemeinnützige Wohnungsbaugesellschaft Bremen mbH）の通史のなかで、ブレーメンおよびブレーマーハーフェンにおける住宅団地の建設が概観されている。グリューンベーフェ団地については、Hans-Joachim Wallenhorst, *Die Chronik der GEWOBA 1924 bis 1992*, Bremen 1993, S. 189-198.

(52) Seidl, *Ernst Mays Architektur und Städtebau nach 1954*, S. 21; Seidl, „ ... aus einer Situation das Bestmögliche zu machen“, S. 219f.

(53) Seidl, *Ernst Mays Architektur und Städtebau nach 1954*, S. 31; ここでザイデルは、こうした高層建築物の用い方にタウトが唱えた「都市の冠 Stadtkrone」としての意味をみている。実際に、マイも同時代の論考のなかで、「中世の「都市の冠」の宗教的意味は消えるだろう」としつつ、「中世都市の魅力は、少なからず、大聖堂と教会を冠として飾る塔の特徴によって都市の景観が活気づけられていることにある。このように、住宅高層建築も、歓迎すべき方法で、都市空間の目印を意味することになるであろう」と述べている。Ernst May, „Wohnungsbau“, in: Reinhard Jaspert (Hrsg.), *Handbuch moderner Architektur*, Berlin 1957, S. 183;「都市の冠」概念については、ブルーノ・タウト（杉本俊多訳）『都市の冠』中央公論美術出版社、二〇一一年（原著：一九一九年）。

(54) Seidl, *Ernst Mays Architektur und Städtebau nach 1954*, S. 27f.

(55) Seidl, *Ernst Mays Architektur und Städtebau nach 1954*, S. 29.

(56) Seidl, *Ernst Mays Architektur und Städtebau nach 1954*, S. 27.

(57) Wallenhorst, *Die Chronik der GEWOBA*, S. 229-267.

(58) Seidl, *Ernst Mays Architektur und Städtebau nach 1954*, S. 34f.; Seidl, „ ... aus einer Situation das Bestmögliche zu machen“, S. 223.

(59) Wallenhorst, Die Chronik der GEWOBA, S. 236; Nils Aschenbeck / Hans-Joachim Wallenhorst (Hrsg.), *Modell Neue Vahr*, Bremen 1993, S. 10-13.

(60) Jörg C. Kirschenmann, „Aufgelockert und gegliedert. Wohnungsbau der 50er Jahre“, in: *Arch+*, 56 (1986), S. 38.

(61) Seidl, *Ernst Mays Architektur und Städtebau nach 1954*, S. 43.

(62) Seidl, *Ernst Mays Architektur und Städtebau nach 1954*, S. 43.

(63) Seidl, *Ernst Mays Architektur und Städtebau nach 1954*, S. 64;「近隣住区」を通じた共同体形成を疑問視する見解は、イギリスやスウェーデンで

先行して登場しており、これと比較してドイツでは批判の登場は遅れたが、よりラディカルなものになったという。Kuchenbuch, *Geordnete Gemeinschaft*, S. 233f.

(64) Seidl, „... aus einer Situation das Bestmögliche zu machen", S. 225; Voigt, „Stratege für die Neue Stadt", S. 237f.

(65) Seidl, *Ernst Mays Architektur und Städtebau nach 1954*, S. 57.

(66) Sabine Kraft, „Die Großsiedlungen. Ein gescheitertes Erbe der Moderne?", in: *Arch+*, 203 (2011), S. 48-53.

(67) Seidl, *Ernst Mays Architektur und Städtebau nach 1954*, S. 61-64; Seidl, „... aus einer Situation das Bestmögliche zu machen", S. 226f.

(68) Vgl. Kuchenbuch, *Geordnete Gemeinschaft*, S. 104, 106 Anm. 23.

(69) Seidl, *Ernst Mays Architektur und Städtebau nach 1954*, S. 64.

(70) もっとも五〇年代末の西ドイツでは、「自動車に適応した都市」も模索されていた。Hans Bernhard Reichow, *Die autogerechte Stadt*, Ravensburg 1959; マイもまた、すでに東アフリカ時代にヨーロッパ人向け住宅団地で駐車スペースを意識した設計を行っている。Herrel, *Ernst May*, S. 80, 82; 他方で、一九六二年エッセンでの建築に関する国際会議では、「交通問題の解決策があると言い立てる者は詐欺師だ」と述べるなど、この問題への対応に苦慮していたことをうかがわせる。Seidl, *Ernst Mays Architektur und Städtebau nach 1954*, S. 56; また、イギリスのニュータウンの計画者も、自家用車による自由な移動によって、「近隣住区」が前提している共同体とは異なる物理的近接性をもたない形で共同性が発展すること、その結果として、モータリゼーションが都市計画モデルに変容を迫るほどの影響を与えるようになることを想定していなかった。ただし、こうした新しい現象によって、地域性や近接性が、共同体形成の「唯一」の基盤ではないという意味で相対化されたものの、地域性や近接性が依然として重要な要素のひとつであり続けていることも、ニュータウンの実践において経験的に示されているという。マーク・クラプソン（本内直樹・椿建也訳）「イギリスのニュータウン計画をふりかえって」中野隆生（編）、前掲書、九三 - 九五頁。

(71) Friedrich Lenger, „Einleitung", in: Friedrich Lenger / Klaus Tenfelde (Hrsg.), *Die europäische Stadt im 20. Jahrhundert: Wahrnehmung, Entwicklung, Erosion*, Köln 2005, S. 13; また、七〇年代初頭を画期とする代表的なドイツ現代史研究として、Anselm Doering-Manteuffel / Lutz Raphael, *Nach dem Boom: Perspektiven auf die Zeitgeschichte seit 1970*, Tübingen 2008.

(72) Tilman Harlander, „Wohnungspolitik", in: Martin H. Geyer (Hrsg.), *1974-1982: Bundesrepublik Deutschland: neue Herausforderungen, wachsende Unsicherheiten (Geschichte der Sozialpolitik in Deutschland seit 1945, Bd. 8)*, Baden-Baden 2008, S. 834; この動きの背景のひとつとして、ヨーロッパ評議会によって、一九七五年が「ヨーロッパ建築遺産の年」とされたことがある。詳細は、本特集の松本論文を参照。

(73) ハーランダー、前掲論文、二六六 - 二六七頁。

(74) 「プレモダン」「モダン」「ポストモダン」の三段階と、「機能」と「記念」ないし「連想」の関係については、本特集の「趣旨説明」の整理による。

(75) 本特集の北村論文を参照。

（あしべ　あきら・東京大学大学院講師）

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

ドイツ現代史における建築、記念碑、都市

松本　彰

1　はじめに

今回、シンポジウム「建築から歴史を語る」でコメントを担当した。シンポジウムは、北村報告での趣旨説明で、具体的テーマとして「一九二〇年代から六〇年代にかけて影響力を持ったモダニズム建築を介したドイツ都市史の試み」とされ、倉方報告で、建築史研究の立場から基本的な論点が提示され、報告と議論は刺激的だった。

シンポジウムの後、倉方氏の案内で、大阪のさまざまな建築を見ながらシンポジウム参加者と「建築と都市」について考える巡検があった。最後に、夕方、中之島の川べりを散策する人々に混じって、市民に親しまれている建物群を訪ねた。川沿いのそれらの建物は、地盤の悪さから維持が難しく、一九七〇年代初頭には壊されて新しい建築物が作られる計画が発表された。反対運動（最初に反対声明を出したのは建築学会だった）で維持・保存されることになったが、基礎の部分の工事は難航し、相当の苦労があったとのことだった。だが、そのおかげで図書館、公会堂など重要な文化の伝統の場、まさに「連想」で歴史を考えさせる場が、現在でも市民に親しまれ、利用され続けている様子は興味深く、「建築から都市の歴史を考える」ことの意味を実感した。

2　モダニズム建築の歴史的位置
――都市史における「近代と現代」

「モダン」は、日本語では「近代」もしくは「現代」と訳されるが、原語（および、それを外来語として用いているヨーロッパの諸語）でも、使われた時代とコンテクストで意味が異なり、またそれが機能的な意味と、美学的な意味で用いられる場合がある。

倉方報告では「モダニズム」の「プレモダン」、「ポストモダン」との関係を、「機能と連想」から問題にした。建築史で「プレモダン」とされる時代は第一次世界大戦前の「長い一九世紀」であり、歴史学の時代区分では「近代」とされる時代である。この時代、ヨーロッパの諸都市では、中世以来の都市城壁が撤去されて環状道路が作られ、中心部には市庁舎、教会、伝統ある商店などが並ぶ広場が整備されていく。その周囲にかなり広い公園や緑地が市民の憩いの場として作られ、さらに市民文化の場としてコンサートホール、劇場、美術館、博物館、図書館などの文化施設が作られていく。それらの施設には一八世紀以来の伝統を持つもの、あるいは歴史的建築物が改造されて作られたものもあった。

オールセン『芸術作品としての都市[1]（The City of Art）』は、長い歴史を持ち、一九世紀に大改造されてヨーロッパを代表する近代都市となったロンドン、パリ、ウィーンの三都市をとりあげて比較し、多面的に分析している。オールセンは序文冒頭で、同書はヤーコプ・ブルクハルト『イタリア・ルネサンスの文化』（一八六〇年）の第一章「芸術作品としての国家」と意図的に関連付けた、としている。注意すべきは、西本晃二が「ブルクハルトの「Kunstwerk としての国家」は芸術作品としての国家と訳すのは誤り」としているように、ドイツ語の Kunst も英語の

artも「技術」の意味で使われ続けていたのであり、ルネサンスの時代に問題とされていたのは「（政治的）技術」の所産としての国家」だったことである。一九世紀になって、「芸術」が神に代わって崇拝されるようになり[2]、その中で国家と都市は変貌していく。

一九世紀に成立した近代都市は、第一次世界大戦後の「現代」に、さらなる発展のために、再開発される。前記の三つの都市には、国民国家の首都としての性格を明確にするため、「（政治的）技術の所産としての国家」が行った戦争の記念碑が置かれた。一九二〇年にロンドンとパリに「無名兵士の墓」が作られ、ウィーンでも一九三四年に城門に戦没者記念碑と戦没者名簿が置かれた部屋が設置された。それらは、現在でも国民国家を象徴する「記憶の場」であり続けている。

実際、「現代」は第一次世界大戦によって始まった。戦時に技術革新は進み、一九二〇年代以降、ガラス、セメントなどの新建材を用いた巨大な建物が建てられはじめる。それらモダニズムの建築は機能的にすぐれ、デザイン的、美学的にも装飾を排した、劇変する現代社会を象徴するものとして強烈なインパクトを与えた。しかし、ナチの時代にモダニズムの建築家はドイツを追われ、ソ連に、日本に、アメリカに亡命した。第二次世界大戦後、世界中の都市に、超高層の巨大なビル群の未来都市が現実化されていく。その後、ポストモダンの運動と、それをめぐる議論が激しくなる一方で、初期モダニズム建築を再評価する動きも盛んになり、あらためて「都市と建築」が問われている。

3 「記念物としての建築」、「記念のための記念碑」、「記念碑としての都市」

ドイツ語のDenkmalは多義的で、『記念碑に刻まれたドイツ』では以下の四つに分けて、そのDenkamalの語義を問題にした[3]。(1)記念碑、(2)歴史的建造物、(3)記念碑的建造物、(4)文化遺産集成。今回のシンポジウムでは、(2)、(3)が主要なテーマとなる。それら「記念物としての建築[4]」は「文化遺産」とされ、都市史を考察するための重要な「史料」である。ヨーロッパでは歴史的な建築物が多く残っており、「建築を見ながら歴史を考える」ことができるが、建物は使用するためには補修を続けなければならず、時代の変化によって改装されることもあり、さらには戦争などによって損傷を受け、修繕され、再建されたものも少なくない。歴史研究としては、その点について、相当に注意する必要がある。

実際、建築物はドイツでは、都市でも農村でも長期にわたって使い続けることを前提に堅固に作られてきた[5]。特に都市の場合には、「機能と連想」が重視され、都市計画が画定され、建築はそれに基づくことになるため、「記念物としての建築」の保護（Denkmalschutz）が重要とされてきた。ただし、どのように保護すべきかについて、長い議論が続いてきた[6]。都市計画は時代によって発展・変化し、過去の「記念物としての建築」との関係が重視され、秩序ある都市の景観が作られていった。オールセンは「記念碑としての都市」と題した章を設け、アルド・ロッシも『都市の建築』で、「集合的記憶」概念を援用しながら、「記念碑としての都市」を論じている[7]。ヨーロッパの都市では地域ごとに高さやデザインをそろえた建築物が並ぶ。中心部の高層建築も下層は商店でも上層は住宅で、中庭が設けられ、住民が共に生活する場となっている。

ドイツは国民国家としての形成が一九世紀後半と遅く、さらにドイツ帝国成立後も、周囲は地続きで多くの国に接し、オーストリアとの関係、ユダヤ人問題など、民族的にも複雑な問題を抱え続けた。それゆえ、「国民の大衆化」の中でドイツの民族意識は異常な高まりを見せ、「記念のための記念碑」、「記念物としての建築」への熱狂は、「政治の時代」だった「現代」＝二〇世紀に猛威をふるった。「政治と文化」の諸運動が多彩に発展し、相互に鋭く対立し続け、多くの建築が戦争によって失われ、さらにその後も時代の変化の中で多くの歴史的建築が破壊された。その反省に基づき、「ヨーロッパ建築遺産の年」とされた一九七五年以後のことについては、本稿の最後に取り上げたい。

さて、ヨーロッパでは重要な記念碑はコンペによることが多く、著名な建築家も設計している。ドイツでは「建築と記念碑」、どちらもDenkmalと呼ばれるため、両者は密接な関係にあった。本稿はその点に注目する立場から、以下、六つのテーマでの図像を紹介し（図の出典は［　］で示した。それがないものは筆者の撮影による）、「ドイツ現代史における建築と都市」について考える手掛かりとしたい。

4　モダニズムと表現主義

図1　モダニズムの建築と記念碑……97ページ

モダニズムを代表する建築家であり、バウハウスの校長をつとめたグロピウスとファン・デア・ローエの設計した建築と記念碑を挙げた。

①　ヴァルター・グロピウス《バウハウス校舎》（デッサウ、一九二六年）［セゾン美術館『bauhaus 1919-1933』、一九九五年、二七〇頁］

②　同《三月の（カップ一揆）犠牲者の碑》（ヴァイマル、一九二二年）

③　②の模型（ヴァイマルのバウハウス博物館）

④　ミース・ファン・デア・ローエ《新ナショナル・ギャラリー》（ベルリン、一九六八年）［Staatliche Preußischer Kulturbesitz, *National Galarie Berlin*, 1980, S.10.］

⑤⑥　同《ドイツ共産党、一一月革命犠牲者（ローザ・ルクセンブルクとカール・リープクネヒト）の碑》（ベルリン、一九二六年設立、一九三五年、ナチによって破壊）と記念碑の前に立つファン・デア・ローエ

後にアメリカに亡命する二人のモダニズム建築家がヴァイマル初期には一一月革命に関係する政治的な記念碑を作っていることは注目される。

図2　表現主義の建築と記念碑……98ページ

ドイツでは、モダニズムと関係しつつ、独特の美学を持った表現主義の芸術運動が、文学、音楽、美術、建築でかなりの広がりを持った[8]。表現主義Expressionismusは、印象主義Impressionismusに対比されるが、芸術運動としてはドイツ独自の文化の再発見に向かい、発展していく。興味深いのは、北ドイツの芸術村として知られるヴォルプスヴェーデに集った芸術家に表現主義が多くの影響を及ぼしたことで、④タウト《ケーゼグロッケ》もここにある。建築では⑦メンデルスゾーン《アインシュタイン塔》にも見られるように、曲線を用いた柔軟な造形が特徴的で、モダニズムの直線的表現とは大きく異なっている。

①ベルンハルト・ヘトガー《ニーダーザクセン・シュタイン》（一九二二年、ヴォルプスヴェーデ）　戦勝記念碑として計画されたが敗戦により戦没者記念碑になった。

②その脇に置かれた石（戦没者の名前と戦没年月日が彫られている）

③ハインリヒ・フォーゲラー《バルケンホーフ》（一八九五年、ヴォルプスヴェーデ）

④ブルーノ・タウト《ケーゼグロッケ》（一九二六年、同）[Hans-Joachim Krenzke, *Worpswede*, Fischerhude, 2001, S. 53.]

⑤エルンスト・バルラッハ《ただよう天使》（一九二七年、ギュストロウのドームの戦没者栄誉の碑として作られ、ナチによって破壊され、原型を元にケルンに第二鋳造が置かれた。その後、ギュストロウの像も復元された）。

⑥ケーテ・コルヴィッツ《ピエタ》（一九三七年）　一九九三年より、拡大像がカール・フリードリヒ・シンケル《新衛兵所》（ベルリン）に置かれている。「ドイツ連邦共和国　戦争と暴力の犠牲者のための中央記念館」とされたそこには、この場所の歴史を説明した銘の各国語訳がある。日本語訳の写真は（『記念碑に刻まれたドイツ』、二三七、八頁）。

⑦エーリヒ・メンデルスゾーン《アインシュタイン塔》（一九二四年、ポツダム）[Manfred Hamm/ Han-Joachim Giersberg , *Potzdam*, Berlin, 1992, S. 61.]

モダニズム、表現主義、社会主義、ナチズムは、それぞれが「政治と文化」の運動であり、その関係は複雑だった。ナチは政権を執ると、退廃芸術展を開催し、特に、表現主義の病的な表現がドイツ人の健康な感性を蝕んでいる、と徹底的に批判した。もっとも表現主義の政治的立場は多彩であり、①ヘトガーは、ナチに入党し、一九三八年に除名された。③フォーゲラーは共産主義者として活動した後、ソ連に行き、シベリアで不遇の死を遂げた。

5　ナチズムと第二次世界大戦の後に

図3　高射砲台（ウィーン）……99ページ

高射砲台はコンクリートの巨大な塊で、「（期せずして）記念碑となってしまった建造物」である。ウィーンの中心部にも二つずつがセットで、それが三セット、つまり六つ残っている。平和で美しい都ウィーンでは、相当に異様な風景であり、当時の空爆のすさまじさを想起させる。現在は②③が水族館、④が展示場として用いられ、データ保管庫になっているものもある。

図4　ナチ時代の地下（オーバーザルツブルク、ベルリン）……100ページ

①ドイツとオーストリアの国境に近いオーバーザルツブルクは、風光明媚な地として知られる。ヒトラーの山荘があり、ナチ党幹部の別荘や軍の関係機関も多く、ナチ時代の外交の場でもあった。ヒトラーの山荘は、ネオナチに利用される危険があるという理由で、戦後すぐに破壊された。一九九九年、ドキュメントセンターができ、ミュンヘン現代史研究所による展示があり、多くの見学者が訪れる。地下に通じる場に②があり、ナチ幹部の山荘や軍の施設へと繋がる地下道（防空壕）が示され

ていた（二〇〇五年に一部が公開され展示がある。筆者未見）。いうまでもなくベルリンにも多くの防空壕が作られ、一部は戦後も核戦争のシェルターとして利用されていた。

③④⑤⑥は《テロのトポグラフィー》と呼ばれる記念施設である。東西ベルリンの「壁」があった場所にある。ベルリンの中心部で、かつてはゲシュタポやナチの親衛隊の本部などがあり、ナチの暴力支配の中枢だった。戦争末期に、ナチによって爆破されたため、戦後かなり長いあいだ忘れられていた。調査すると地下牢が見つかり、ここを保存しようという運動が興ったのは、ベルリンの「壁」が崩壊する直前で、現場の地表にその当時置かれた銘板がある。「壁」崩壊後、青空展示が行われ、注目されるようになった。

東西ドイツの統合後、ベルリンには多くの記念碑が作られた。誰のために、何のために、どこに、どんなメッセージをこめた記念碑を作るべきか、多彩な議論が沸騰し、さまざまな犠牲者のために、「記念のための記念碑」が作られた。それと並行して、この場所にはどのような施設を作るべきか、市民運動と専門家の議論が続き、計画は練り直され続けた。

二〇一〇年、《テロのトポグラフィー》は完成した。これは「記念のための記念碑」ではなく「記念物としての建築」だが、建物の本体は破壊され、存在するのは③地下牢だけである。地上にはシンプルなドキュメントセンター以外は何もなく、それだけに周囲が一望できる。⑥の左に見える建築は、一八八一年に博物館の一部として作られ、第二次世界大戦の空襲で破壊され、再建された。現在は設計者の名をとってマルティン・グロピウス・バウと呼ばれ、展示館として使われている。マルティンは図1①②で紹介したヴァルター・グロピウスの大叔父で、《新衛兵所》を作ったシンケルの弟子である。⑥の右に見えるのは、旧プロイセン下院である。重厚な建築物群に囲まれて、「壁」の下に設けられたナチ時代についての展示を見ると、まさにここで、というリアリティーは圧倒的である。

図5　《瓦礫女》（ドレスデン、ベルリン）……101ページ

ドイツでは「零時」とされる一九四五年にも地下にはライフラインが残っていた、との指摘で、戦争直後のウィーンを舞台にした映画『第三の男』の巨大な地下下水道での追撃戦を思い出した。たしかに、それは重要な指摘だが、焼夷弾による空襲の後には焼野原が広がった日本と異なり、建材に石や煉瓦を多く用いているヨーロッパでは、建物が破壊された後、まずは膨大に残された瓦礫を撤去しなければならなかった。働き盛りの男性の多くが戦死し、あるいは捕虜収容所などにいた時代、作業は女性の重労働によって行われ⑤、その記念碑が残され、戦後の女性の社会進出を象徴するものとなった。特に④激しい空襲で破壊されたドレスデンでは、市庁舎前に①《瓦礫女》がある。旧東ドイツ領内のベルリン市庁舎前には男女一対の《建設を助ける男と女》が建てられた。⑥一方、西ベルリンのものは、公園の目立たないところにある。

① ヴァルター・ラインホルト《瓦礫女》（ドレスデン、一九五二年鉄製：一九六七年ブロンズ製、二〇〇〇年に改装）背景はドレスデン市庁舎

② 一九八七年、筆者がはじめて訪ねた時も、聖母教会はまだ瓦礫の山だった。

③ 再建された聖母教会（二〇〇五年）教会前にルター像

④ 一九四五年二月一三日から一五日にかけてのイギリス、フランス軍の空襲により、ドレスデンは灰燼に帰した［Matthias Gretzel, *Als Dresden im Feuersturm versank*, Hamburg, 2004, S.99.］。

⑤ 瓦礫女の作業、再利用のために石を整理している。［Informationszentrum Berlin, *Im Überblick. Berlin*, 1984, S.23.］。

⑥ 《瓦礫女》（ベルリン、ハーゼンハイデ公園［旧西ドイツ］）

6 ナチズム後の西ドイツ

一九四五年以後一九六〇年代までの西ドイツについて、芦部報告がマイの帰国後の活動を追いながら、論じている。マイの戦前からの運動は、「二〇年代から五〇年代にかけて田園都市運動と深く関わる「衛星都市」「近隣住区」という都市計画の構想の中で展開され、既存の都市で失われた共同体を、新しい建築の理念によって構築しなおすという社会改革的関心と強く結びついていた」。しかし、六〇年代にあらわれてきたのは、「「密集による都市化」という都市像」だった。「ショッピングセンターや充実したインフラを維持するには、その採算がとれる人口が必要であり、経済性の観点から、より大きく、より高密度になった新世代の大規模住宅団地」が登場した。その変化の前提には、モータリゼーションの急速な展開があった。

高速道路網が完備し、一般道も整備されて自動車が社会生活に不可欠のものになったことは、生活の在り方を大きく変化させた。ドイツ全土でモータリゼーションが進んだことは、地方ごとに美しく、豊かな中小都市が大都市と緊密な連携することが可能になったことを意味した。小さな「プレモダン」な都市は、「中世都市」そのまま、と言われることがあるが、実は一九世紀のツーリズムの時代に整備・美化された都市も多い。また、戦災で相当に被害を受け、再建された都市もある（ローテンブルクなど）。モータリゼーションの発展によって、地方の中小都市も経済的ネットワークに組み込まれて再生し、ベッドタウン化し、さらには観光都市、リゾート都市として発展した。

ドイツでは、一九七〇年代以降、大学紛争やエコロジー運動の影響で、モータリゼーションへの批判が強くなり、都市は多様化していく。最初に引用したオールセンの本の序文では、次のように書かれている。「一九世紀の都市が過去の偉業にもとづいて造りあげられたのに対し、二〇世紀の大都市は過去の遺産をしばしば冷笑と軽蔑をもって眺めてきた。《都市復興》の時代に行われた陽気な破壊と、以前の慣習を拒否した建築様式と都市空間の配置の創造は、都市の歴史に関する学問の主流から暗黙のうち支持された――やっと現在になってからわれわれは十分な富を蓄積し、非都会的もしくはポスト都会的方法で生活を整えるのに適切な科学技術を獲得したのだった」[9]。

二〇世紀後半の西ドイツの都市の歴史を分析したティルマン・ハーランダーは、一九七〇年代の「パラダイム転換」に注目している[10]。「都市計画の文化や目的概念が根本的に変化しーそれまでほとんど注意をはらわれていなかった歴史的都市の価値が、新たに注目された」として、ヨーロッパ評議会によって「ヨーロッパ建築遺産の年」[11]とされた一九七五年の画期としての意味を強調している[12]。

一九八四年からフランスでは九月の第三週末が「文化遺産の日」とされ、実際に利用されているエリゼ宮などを公開し、歴史的建築遺産を考える運動が発展している。ドイツも一九九三年から参加している。ドイ

ツではTag des offenen Denkmals（記念碑、記念物公開の日）と呼され、毎年、テーマを決めて、自治体ごとにさまざまな行事が行なわれている。テーマは広範囲にわたり、たとえば、二〇〇一年は「記念物としての学校、学校としての記念物――若者と文化遺産」、二〇〇五年は「戦争と平和――記念碑、記念物は記憶し、警告する」、二〇〇六年は「芝生、バラ、花壇」、二〇一〇年は「運動の中の文化――旅、商業、交通」などが取り上げられている。[13]

ちなみに、今年二〇一九年はバウハウス設立一〇〇年にあたり、テーマは「モデルネ――芸術と建築における変革」と発表されている。

7　モダニズム建築の国際的位置
――パリのラ・デファンス地区再開発

図6　パリの二つの門と記念碑……102ページ

最後に、「二〇世紀における都市と建築」を国際的に考えるために、パリにおける都市改造を取り上げたい。[14]第二次世界大戦後、パリを高度の機能性を持つ世界都市にするために再開発が必要とされた。長い歴史と伝統を持つパリは、市の中心部に多くの歴史的建築がある。パリ市内にもモダニズム建築による新興地区が作られていくが、一九五八年にフランス政府は中心部から離れたラ・デファンス地区の大規模な再開発計画を発表した。セーヌ河沿いのルーヴル宮殿からエトワールの凱旋門に向かう、シャンゼリゼ通りを通る軸線を伸ばした線上だった。

②エトワールの凱旋門はナポレオンの戦勝を記念する代表的建築物で、第一次世界大戦後、そこに①《無名兵士の墓》が作られ、永遠の火が灯され、軍の行事が行われている。一方、ラ・デファンス地区は、独仏戦争（一八七〇、七一年）中の一八七一年一月一八日、ヴェルサイユ宮殿鏡の間でドイツ帝国成立式典が強行されたことに対抗したパリ市民が立ちあがり集結した場所だった。フランス革命一〇〇年の一八七九年の時に、独仏戦争記念碑のコンペが行われ、《自由の女神》の作者バルトルディや彫刻家ロダンも参加したが、バリアスの作品が選ばれ、一八八三年、⑤《ラ・デファンス（祖国防衛）》がその地に置かれた。

そのラ・デファンス地区にフランスを代表する企業の事務所、官公庁と、そこで働く人々用の住宅が入ったモダニズムによる超高層建築群が林立している。この地の再開発は、その後も新しい計画によって継続され、フランス革命二〇〇年の一九八九年に、巨大なオフィスビル③《グランダルシュ》で、革命記念日の七月一四日から三日間、サミットが行われた。

①《無名兵士の墓》（一九二〇年）
②《エトワールの凱旋門》（一八三六年）三色旗が翻り、軍の行事が行われている。門には「ラ・マルセイエーズ」のレリーフもある。
③《グランダルシュ》（一九八九年）　正式には《友愛の大アーチ》とされ、フランス革命を記念する建築物だが、日本では②に続くものとして、《新凱旋門》と言われることもある。
④　ラ・デファンス地区の高層ビル街
⑤　ルイ=アーネスト・バリアス《独仏戦争記念碑》（一八八三年）

フランス革命二〇〇年の一九八九年は世界的激動の年だった。六月四日に中国で天安門事件が起こり、七月のパリ・サミットの後、夏に東欧

での反体制運動の動きが加速化し、一一月九日、「ベルリンの壁」は崩壊した。それから一年もたたない一九九〇年一〇月三日に東西ドイツは統合した。

8　おわりに――ナチズムと東ドイツの後に

二〇世紀のドイツは、一九三三年から一九四五年まで「ナチズム（国民社会主義）」、一九四八年から一九九〇年まで「東ドイツの社会主義」の時代を経験した。二〇世紀の「建築と都市」について再考するためには、この二つの時代の建築について、さらにそれが一九九〇年以後、どのように変化したのかについても、確認する必要があろう。

「ナチズムと建築」については、これまでも多くの研究が蓄積されているが、ニュルンベルク党大会場やベルリンのオリンピック会場が問題とされることが多い。それらはオーストリアのマウトハウゼン強制収容所裏から切り出された自然石を用いた、古典主義様式に基づく壮大な建築で、大衆自らが参加し、使用する「記念物としての建築」として、ナチの運動の一面を象徴している。

一方、ナチは一九三六年から三九年にかけて、バルト海に面したリューゲン島に二万人の保養客が滞在できる保養施設《プローラ》を建設した。コンクリート製でデザイン的にもモダニズムを引き継いだこの施設は、ナチの労働者組織だったドイツ労働戦線の下部組織として余暇の組織化を進めた歓喜力行団（KdF）が建設したものだった。《プローラ》は一九三七年のパリ万国博覧会で、建築部門グランプリを獲得したが、「リューゲン島の巨人」と呼ばれ、その巨大さはまさにナチ的である。戦中、戦後には難民の施設となり、東ドイツ領となってからは軍が利用していた。一九九〇年以降、一部は博物館となり、この「記念物としての建築」の歴史が展示され[15]、二〇一一年から一部がユースホステルとして利用されている[16]。

東ドイツ時代にも労働者のための集合住宅群が膨大に建てられ、ベルリンやライプツィヒには超高層ビルも建設された。それらもモダニズム建築の系譜で考えてみる必要があろう。一九九〇年以降、住宅の一部はホテルに改装されて使用されている。

二〇世紀の二つの大戦とその後しばらくは、ヨーロッパは「現代の民族大移動」の時代だった。国境が大きく動き、ナチ支配の崩壊後、古くからの居住地を追われたドイツ人も多かった。冷戦の続く中、大量の被強制移住者、難民は移動の過程で多くが犠牲になった。多文化社会化がより進行している中、きびしい歴史と共に、現在、さらに未来のことが、あらためて気になる。

注

（1）ドナルド、J・オールセン（和田旦訳）『芸術作品としての都市――ロンドン・パリ・ウィーン』芸立出版、一九九二年、一頁以下。

（2）参照、松宮秀治『芸術崇拝の思想――政教分離とヨーロッパの新しい神』、白水社、二〇〇八年。

（3）松本彰『記念碑に刻まれたドイツ』東京大学出版会、二〇一二年、五五頁以下。同「変わる記念碑」『UP』五三八号、二〇一七年。

（4）参照、現在のドイツ連邦共和国の文化財、文化財保護の制度について、叢書「文化財保護制度の研究」『ヨーロッパ諸国の文化財保護制度と活用事例 ドイツ編』文化財研究所東京文化財研究所、二〇〇三

年。記念物は文化財・文化遺産とされ、発掘・調査される埋蔵文化財なども含まれる。日本と異なり、彫刻、絵画などが、個別に国宝や重要文化財に登録されることはなく、建築物やその一部、さらには記念物地区が問題にされるため、「記念物としての建築」の保護が、最も重要な課題となる。また、ドイツでは、記念物保護は各邦（州）の管轄であり、州ごとにかなりの違いがあるため、歴史的に考察する場合、時代にごとに相当に複雑な問題がある。

（5）参照、坂井洲二『ドイツ人の家屋』法政大学出版局、一九九八年。ドイツ民俗学の研究書として、現地での丹念な調査に基づく研究は、都市の建築を考える場合にも参考になる。ドイツには木造でもかなり大きな家が多く、古くから地下室と屋根裏が設けられていたことなど、日本との比較も興味深い。地下室は戦時下では、防空壕としてのみならず、貴重な記念物の保管場所としても重要だった。地下のインフラ整備の問題とも関係する。

（6）参照、Achim Hubel, *Denkmalpflege*, Ditzingen, 2011(3. Aufl.).

（7）アルド・ロッシ（大島哲蔵／福田晴虔訳）『都市の建築』大龍堂、一九九一年。

（8）参照、松本『記念碑に刻まれたドイツ』、第四章「ナチズムとドイツ表現派」。

（9）オールセン『芸術作品としての都市』、八、九頁。

（10）ティルマン・ハーランダー（北村昌史／長尾唯／前田充洋訳）「二〇世紀後半ドイツ連邦共和国における住宅と都市の発展」、中野隆生編『二〇世紀の都市と住宅――ヨーロッパと日本』山川出版社、二〇一五年、二六五頁以下。

（11）上記論文では、「欧州史蹟保護年」としているが、ここでは「ヨーロッパ建築遺産の年」とした。「ヨーロッパの文化遺産」への注目は、音楽では「ピリオド楽器による演奏」の実践として発展し、文化史の再考を促していく。ドイツでは、「記念碑・記念物公園の日」には各地のオルガンも公開されている。

（12）上記論文では移動展示のためのパンフレットが紹介されているが、書籍として、一九七五年に Hans Maier/ Georg Kahn-Ackermann / Walter Scheel（Hg.), *Eine Zukunft für unsere Vergangenheit - Europäisches Denkmalschutzjahr*, Berlin 1975 が出版され、四〇周年記念論文集として、Michael Falser/ Wilfried Lipp (Hg.), *Zukunft für unsere Vergangenheit: Zum 40. Jubiläum des Europäisches Denkmalschutzjahres (1975-2015)*, Berlin, 2015 が出版された。

（13）手元にこの時代の「記念碑・記念物公開開の日」のパンフレットが数冊ある。特にベルリンのもの（インフォメーションで配布）は、それぞれ約一〇〇頁で、記念碑、歴史的建築物について、多くのカラー写真と共に詳細な紹介がある。なお、倉方報告で紹介されたように、大阪では、二〇一三年より一〇月の週末に「イケフェス大阪（生きた建築ミュージアム）」が行われており、二〇一九年は一〇月二六、二七日に行われる予定である。

（14）鈴木信太郎『都市計画の源流――東京、ロンドン、ニューヨーク』山海堂、一九九三年、一三七頁以下。

（15）Joachim Wernicke/Uwe Schwartz, *Der Koloss von Prora auf Rügen: gestern – heute – morgen*, Verlag Museume Prora, 2006 (2.Auflage).

（16）*Tagesspigel*, 8. 10. 2014.

（まつもと　あきら・新潟大学名誉教授）

図１　モダニズムの建築と記念碑

図２　表現主義の建築と記念碑

図３　高射砲台（ウィーン）

図４　ナチ時代の地下（オーバーザルツブルク、ベルリン）

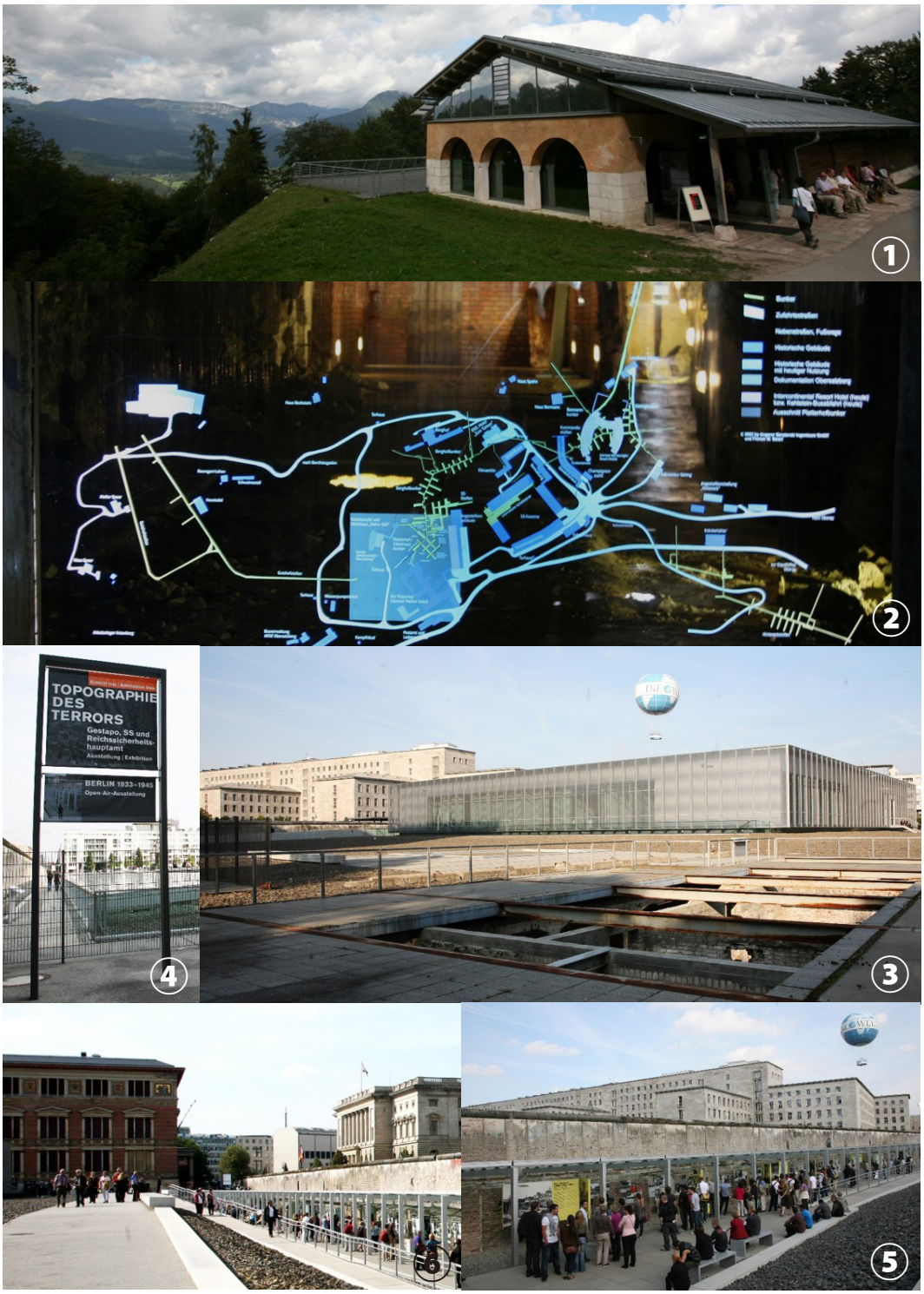

図５　《瓦礫女》（ドレスデン、ベルリン）
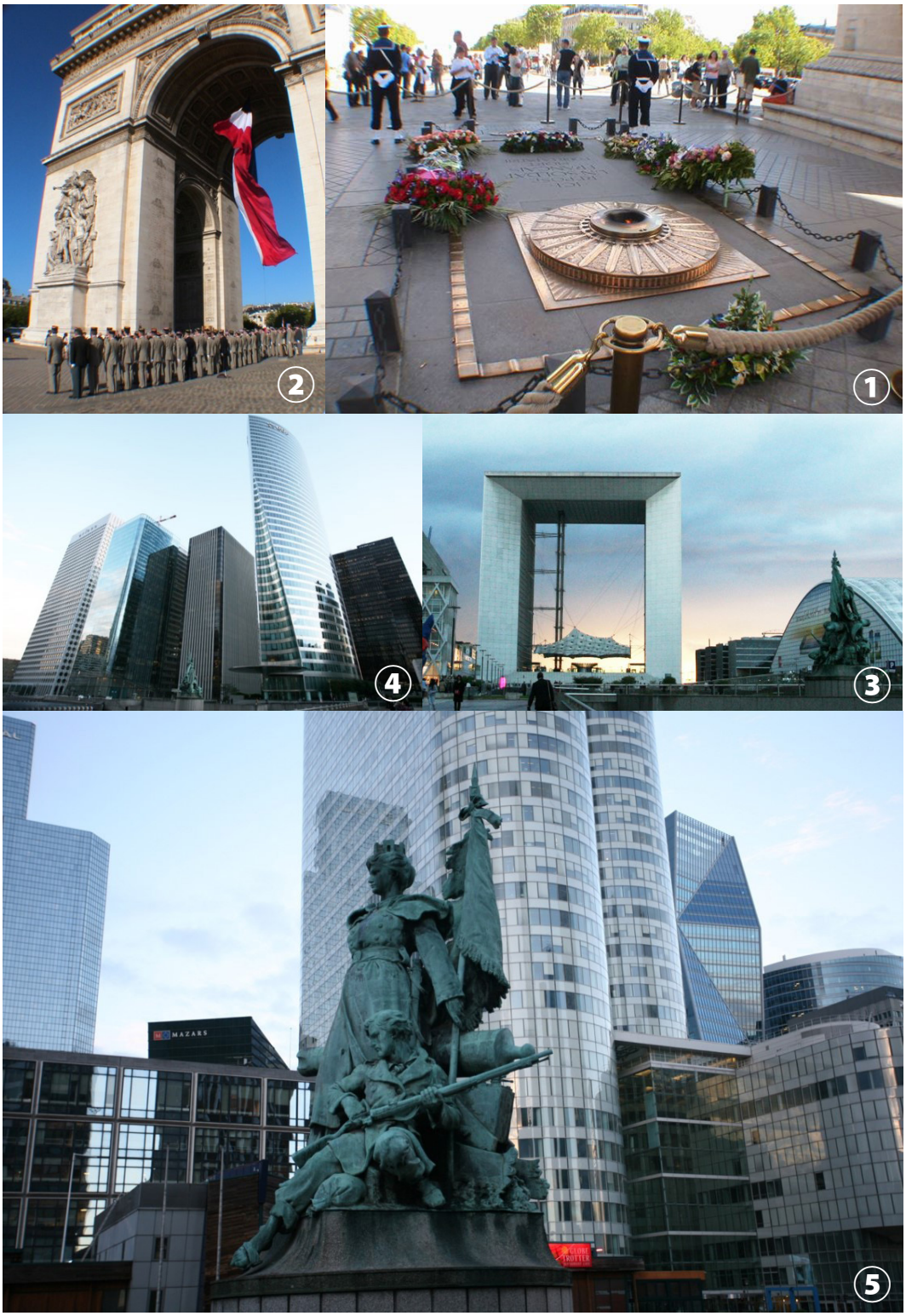
図６　パリの二つの門と記念碑